
金剛の武人

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金剛の武人

【Zコード】

Z0087Z

【作者名】

—

【あらすじ】

俺の名前は岩元昌也。高校2年生だ。ある日、金髪の美女に、異世界に来ないかと誘われる。冗談だと思つてついていつたら本当に異世界。来ちゃつたもんはしじがなから、ここで過ごそ。

主人公最強ではありません。また、主人公がハーレムを作ることもありませんのご了承ください。

初投稿ですので、誤字脱字、文章の幼さが目立ちますが、お許しく

ださい。

初投稿なので、評価とかコメントしてくれると嬉しいですー…というか、超欲しいです！

0話（前書き）

これは初投稿作品ですので、温かい田で見守ってくれると嬉しいです。

ものすゝじ手ですが、最後まで読んでくれると嬉しいです^ ^

俺の名前は元昌也。とある学校の高校2年生だ。頭は・・・いい。だが、それも意味はなくなつた。

なぜなら今俺は異世界に来ている。いや、連れてこられたというほうが正しいだろう。

自分も実際何が起こったか理解に苦しむ。辛うじて分かるのは自分が違う世界に来たということだ。

「マサヤ君？」

誰だ？ そうだ、俺をココに連れてきた人だ。

女性で髪は金髪で肩あたりまでの長さだ。そして綺麗だ。

なぜこんなことになつているかと、ある日、高校からの帰り道、俺はこの女性に声をかけられた。

「君、違う世界に行つてみない？」

唐突すぎた。3秒ほど頭の整理に使つた。日本に金髪の美女がいることも不思議だが、俺はあまり深く考えなかつた。冗談だろうと思いつながらもその人があまりに綺麗だったので、行けるなら行きたいと答えてしまつた。そしたら、

「じゃあ決まりね。あなたに関する記憶はマスターに頼んで、この国から抹消しておくれから。」

オイ待て。マジで？

暗い路地にものすごい力で引き込まれ、金髪が何か唱えると、黒色のどこでも、アに似たものが出てきた。もう逃げれないと思つた俺は、その中に・・・入つた。

中は真っ白だつた。10秒ほど歩くと出口が見えた。出ると、砂漠。そして目の前に20メートルはあるかと、門。

俺はただただ口をあけるしかなかつた。そんな時、金髪が、「君、名前は？」
と言つた。

「岩元昌也です。」

「聞かない名前ね。あ、違う世界か？」
ふざけてるのか？と思いつつ、名前を聞き返した。

「メアリーよ。」

「すいません、メアリーさん。ここはどこですか？」

「ここはミコーシア。私はとある集団の一人でね、今回私はここに依頼で来てるのよ。」

「…俺なんで呼ばれた？」

「今回の依頼はちょっと一人じゃきついから君を連れてきたってわけ。
なるほど。」

「君はみたところ魔力が多そうだったから来てもらつたわ。あつ、
そうだ、この石に触れて。」

そこには黒い石。俺は手を乗つた。すると石は、光りだした！
という反応はなく、黒いままだつた。

ちょ＼これ大丈夫＼？

「ええ？！多いのは魔力だけ？？でも属性はある…。
やばい？これやばい？」

ずっとメアリーさんが黙つてるので、たまりかねて声をかけた。
すると

「君は魔力量が普通の人より多い。けど、魔術を使うのには適して
いない。」

「それって結局ダメじやんよ。メアリーさんよ。」

「しようがない。君には体術を仕込むわ。依頼の期間は2週間。今

から5日間あなたには基礎を教えるとするわ。いいわね？

その後の説明によると、俺は魔力を具現化する能力が低いらしく、魔力によって、肉体強化するしかないという。だが、そのうち少しは魔術も使えるようになるだろ？と言われた。それならいいかなと、承諾した。

とりあえず、町に入らうといわれたので門を抜け、民宿のよつなどにに入った。
町は広かつた。ものすごい。こんなところで何するんだろ、と思つた。

その後、特訓が始まった。最初は魔力を感じるという訓練だった。
「神経を集中すると何か流れてる気がしない？こっちの世界なら君は間違いなく感じれるはず。」

右手に神経を集中した。確かに温かいものが流れている気がした。
「あとはイメージしだいよ。それを手全体に広げてみて。」

イメージ・・・してみたがさすがに無理だった。
今日はずっと口元を繰りかえすらしい。

4時間後、ずっと俺はがんばったのにメアリーさんはとこと風呂に入り、飯を食べ、テレビを見て爆笑している。

クソ野郎、いつか見てろよ？

そんな俺も、魔力を広げられたらしい。力の入り方が違う。

「できたっ！」

「ふーん、じゃ次は足ねー」

足もすでに終わっていた。

常人より少し早いスピードでメアリーさんの前に立つた。

「あら、早いわね」

「ちよ、メアリーさん適当じやないすか？」

「メアリーさん？違ひわ、さ、師匠よ。」

「どうでもよひつ……」

「まあいこわ、今日はコソでおしまい。明日は本格的に行くわよ。
もつと上手くなればいいまで……むりー。」

ええ～早すぎ～ ～

その夜

悔しかつたからかメアリーさんが寝たのを確認し、ずーっと、自分で訓練していた。

「あの子、以外にがんばるわね。私も教えるなら私を超えるくらいに育てなきやね。」

おきていたのかメアリーは口元でつぶやいた。

目が覚めた。ああ、そうだ。ここは異世界。もつと帰あよびる場所はないんだつた。

母さん、何してるかな。父さん、仕事クビになつてないかな。学校の友達、祖父母、親友、前の世界のあるゆるもののが頭に浮かんだ。

昨日までは何もなかつたのに、今日になつてさびしさがこみ上げてきた。

でも、もう遅い。ここで生きるしかないんだ。そう思いながら、体を起こした。涙が出てきた。

「マサヤ君、起きた？」

メアリーさん、いや師匠が呼びかけてきた。とつたに涙を堪え、拭く。そして

「はい、起きてます」

と答える。

もつこいつなつたらここで生き抜いてやる。

「今日は何やるんですか？」

「ええ、今日は買い物よ」

一瞬で緊張感が抜けた。

だつて、本格的つつたのに買い物だよ？

「まずは服。そして食料、あとはまあ安い武器かな。服、あ、学生服やんけw

今更ながらこじだと超恥ずかしいw

で、ここは民宿？を出て一-five分ほどあると商店街についた。ここはある程度のものなら何でもそろっているらしい。

まずは服だが、ここでは、ドラ Hの村人のような服が一般的だつた。といふことで、後は、『想像にお任せします。

師匠もこんな感じだ。

店の裏を見てみると、黒とも濃い青ともいえる物体が動いていた。すぐに居なくなつたので、気のせいだらうとあまり深く考えなかつた。

「といひで師匠、依頼つて何ですか？」

「何言つてゐるよ、あなたまだ戦えないじゃない。」

戦うのかい？

食料市場にて・・・

前の世界の食べ物とほとんど同じだつた。

俺は師匠の買い物を見守りながら、何作るんだ？といつてワクワクしていた。

ここでもさつきの物体を見た。けれどまた気にしなかつた。これがあとあと関係してくるとは、昌也は思つてもいなかつた。

続いて武器屋。

剣や槍や槍やり・・・もう何でも揃つていた。
使えなきやうな枝まであった。

「やうねえ、マサヤ君には体術を極めて欲しいから、この銅い籠手にじよひかしり。」

銅は魔力を比較的通しやすいらしい。もつと上質なものもあるがらしが。

「まあ、今は戦力にもならないし、これにじょつか。」

「酷い、傷ついたw

「まあ、買つもの買つたし、帰ろうか?」

「はい、そうですね。」

昌也とメアリーは、商店街を後にした。

一方さつきの商店街の裏では

黒っぽい青っぽい物体が増殖していた・・・

そのころ、民宿に戻った一人はこんな話をしていた。

「マサヤ君、私はある集団に所属しているといった感じ?」

「はい、それが?」

「これから行動を共にする上で知りなきやいけないこともあります」と思いうの。今から君にはその話をしようと思つたわ。」

「分かりました。お願いします。」

「私の名前はメアリー・ティーフ。フィアラルという組織の一人よ。メンバーは私を含めて7人で、剣使い、銃使い、魔術使いとか、とにかくいろいろいるわ。」

おかしい。俺、どうみても必要ないw

おかしい。俺、どうみても必要ない。何故俺を？必要ないじゃないですか。何か少數精銳っぽいし。」

「言つたでしょ？」の依頼は一人じゃ無理なの。君の力が必要なのよ。」

「はあ、本当ですか？」

「本当よ？信じなさい。」

意外と疑い深いわね・・・

その後、3日目、正拳突きなどの基本技

4日目、魔力を流しての基本技

5日目・・・師匠との組み手

「全力でかかってきなさい？」

「はい！」

まずは深呼吸。相手の表情、呼吸、予備動作を全神経を集中して観察する。まずは俺が左足を出し、右の正拳。メアリーさんは軽々かわし、左手で俺の右腕を引っ張り、その勢い右肘を俺の胸に入れようとする。俺はそれをギリギリで右にそれでかわす。

「冗談じゃない。強すぎる、洒落にならない。」

今度はメアリーさんが動く。右手が動いた、と思ったとたんに左手が動き、正確に俺の腹部を捉えた。

俺は思わず悶絶した。

「なかなかいい感じに魔力をコントロールしてるけど・・・まだま

だね。あなたは攻撃を防がれることを考えていなかね、それで力
ウンターを食らつ。次からは気をつけるといいわ。」

「ひひひ・・・

そのまま丸一日が過ぎた。俺もだんだんと慣れてきた。
でも、やっぱり強すぎた。一回も勝てない。明日から俺も参加だつ
てのに・・・

「今日はもういいわ。ほんとに100分の1ぐらいしか教えられな
かつたけど、明日から仕事よ、今日は早いけどもう寝なさい。」

「はい、おつかれさんした~。」

大丈夫だろうか。

依頼つてどんなのだ、今までの修行からして、戦うよね・・・
一人不安を抱える昌也であつた・・・

「おはよー、マサヤ君。じゃあ、まずは依頼の説明ね。」この街にベビードラゴンといわれる魔物が大量発生してるの。ドラゴンじゃないわよ? でも、集まるとほんと厄介だから君にも手伝って欲しいの。

L

「手分けして倒そうという」とですか?」

「やつよ。それでこれを……」

「アサヒは携帯?」をもらつた。これで連絡を取り合ひはじつた。

「分かりました。じゃあそのベビードラゴンの特徴を。」

「全体的に黒っぽくて、何がなんだかよく分からぬ生命体よ。一匹だと大して強くないけど、集合するとドラゴンのように大きくなる。それが一番厄介なのよね。」

アレジやん。なつぢやうヤジじやんW

「これから一週間、君と私は聞き込みを行う。だけど、ベビードラゴンの集合が近いようならば今にでも動く。だけど、ソレらしい情報が・・・」

「 」

「早すぎるよ……どうなつてこるの？まあいいわ。とにかく来て。」

誘われるがままに現場へと駆けつけた。

そこには、ボーリング球ほどの黒っぽい物体が2つ。・・・コレか。

「ちょうどいい。マサヤ君、見てなさい。」

メアリーは足に魔力を流した、きれいな足だなーなんて見とれないと、そこにはもうメアリーはいなかつた。

そして、黒い物体が水平に飛んでいた。

メアリーが蹴ったのだ。畠也も早すぎて（集中してみていなかつたが）捉えられなかつた。

その魔物は、泡のよつに消えていった。

俺もやってみよつ。

幸い魔物は弱い、師匠同様、足に魔力を流し込み・・・一気に距離を詰め、蹴り飛ばした。

まだ死んでないらしく、もがき始めた。そして、分裂した・・・

「マサヤー！早く！そいつらは10体集まると・・・」

周りから魔物が5・6体現れた。一点に集まりグニョグニョと蠢いた。グロイ・・・

そして、人一人ぐらいの大きさになつた。ほぼ球体だが。

「くつ！マサヤつ、行くわよ！

「は、はい！」

メアリー、魔物の目の前に移動し攻撃を繰り出そうとしている。明

らかにあせつて いる。

魔物から何本もの手が現れた。メアリーはとつそに退いた。

しうがないわねえ。とつぶやいたのが聞こえた。メアリーの手が燃えていた。魔術である。

一気に距離を詰めて2発、3発、4発と攻撃を繰り出し、退く。魔物の5分の1が削られた。だが周りから魔物がウニョウニョウと寄ってくる。

昌也はその魔物を迎撃する。だが、間に合わない。

10体集結した・・・

一瞬で巨大化した。15メートルはある。黒い竜だ。メアリーさんは冷静になつて いた。

「マサヤ君、私、ちょっとだけ本気出す。」

と言つといきなり雰囲気が変わつた。

魔力の量が大幅に増加したのが一目で分かる。

「いくわよ・・・ヴォルカラムス。」

目の前に、炎でできた槍が現れた。ソレを手に取り、まず、集合していない魔物を焼き払つた。

「す」「・・・」

マサヤは思わずつぶやいた。

そんな中、ドラゴンは分裂しうつとして いた。

「させないわよつ！」

槍が一気に10メートルぐらいまで伸びた。

そして、頭を切り落とした。切り落とされたほつた竜は消えた。だが、分裂した方は生き残つて いた。

「マサヤー！あなたがやりなさい。」

槍を俺に向かって投げてきた。

「大丈夫！君にも火属性があるからー。」

槍を受け取ったとき、槍の炎がさらに激しく燃えた。

「 「 」 」

今の俺ならやれる。

一気に腹部に接近、黒い手が伸びてきた。

「くっそ！」

槍ではリー・チが長すぎると、一回手放し、手と足を駆使し、すべて落とした。

そのとき、手足が光ったように見えた。だが、気にしない。すぐさま槍を拾い、腹に突き刺した。どんどん赤くなっていく。それを引き抜き、腹の下を潜り抜け、しつぽを切断する。軽い。振り向きざまに、槍が伸びた。意思を反映するらしい。翼を落とす。

「グググオオオオオオオオーーーー！」

もはや竜ではない魔物の頭部めがけて槍を投げつける。

音はなかつたが、命中したようだ。頭のほうから泡のよごに消えていく・・・

勝つた。できた。

槍は消えて、力が抜けた。膝から崩れ落ちる俺を、師匠が支えた。

気づいたら、そつきの民宿だった。寝かされている。

「起きた？」
「声がない。」

「起きたよつね。君は魔力の使いすぎでこうなつてる。そのつり良くなるわ。」

「ありがとうござります。と首を軽く曲げる。

「それにしても驚いたわ。あなた意外とやるわね。じいさんが目をつけただけある。」

「じいさん? 誰だ?」

「まあかなり早く依頼は終わつたけど、まずは休むといいわ。そしたら帰るわ。」

「あ、あと君のことだけど、君は、火、雷、氷、土の属性がある。多いわ。そのうち、使いこなせるようになる。そして、君はおそらく、魔力が多いだけではない。何かある。まだ分からぬけどね。」

もしかして、さつき光つたヤツか?

瞼が重くなつてきた。もういいや、考えるの面倒くさいわ。俺は意識を手放した。

「なんなの? この子。もはやセンスの塊よ?」

じいさん、やつぱりあなたの目は狂つていなかつた。私はこの子を絶対連れて帰ります。

マサヤの未来を創造しながら、メアリーも眠りについた。

「マサヤ君、準備はいい?」

「OKです。」

「じゃあ、ファイアラルへ行くわよ。」

「はい。」

疲れは全部取れたわけではないが、そのファイアラルとこいつものが楽しみだったので、早く出発することにしてもらつた。ここからだと約三日かかるらしい。

帰り道の砂漠にて

・・・・

「すいません、この前のアーティアみたいなヤツはだせないんですか?」

「あれはとても魔力を使うのよ。あれは2週間ぐらいしないと使えないわ。わざわざ君のために使つたのよ?感謝しなさいよ。」

言わなきゃ良かった。

「それにしてもおかしいわね・・・あんなに早くベビークリーゴンが集合するなんて・・・」

俺はまったく知らないのなんとも言えないが、とにかくおかしいらしい。

「君の魔力が関係してるのでかい?」

「それじゃあ俺、厄介者じゃないですか？」「普通はありえないんだけどね・・・」「ほんとに俺か？？」

「そろそろお腹がすいたわね。はい、干し肉。」「硬えー、しかもショッパー！」

「うう・・・」「

「ちょっとしつかりしてよ。これからのお食事はコレよ？これから三日間、こんな生活か・・・

「ふいあらるって何ですかね。」「

「ファイアラルは、小さいけどギルドよ。でも、皆が強すぎて、誰も入らないんだけどね。」「

「それで今回も依頼つてわけですか。」「

「ええ、そうよ。でも本当の目的はそこじゃない。君を連れてくることよが本当の目的よ。」「

俺？

「ファイアラルの長、フォーレルニアっていうんだけど、君の事を見つけて、私に連れてこいって言ったの。」「

「そうなんですか。でも俺なんかでいいんすかね。」「

「じいさんの目は間違ってなかつたわ。君には素質がある。私にも感じるもの。」「

正直、にやけてる。隠せないから下を向く。

「マサヤ君、家族のこととか、友達のこと思い出せない？」

いきなり聞かれて正直驚いた。しかし、思い出すに決まってる。

「実は、君の前にもう一人そういう子がいるのよ。君は覚えてないかもしれないけど、その子は君の事をしつかり覚えてる。」「

そういうわれた瞬間、頭の中では、たくさんの情報が飛び交っていた。

昔の友達？

そういうえば、何か普通の日常で違和感があつたような・・・
親友だつたりするのか？
しかも強いのか？

「名前は何でいいますか？」

「思い出して頂戴ね。コウトよ。」

コウト、コウト、優斗・・・優斗！

神崎優斗だ！

「思い出しました。俺が、あいつを忘れるなんて・・・
「しようがないわ。じいさんの魔術はどれも強力よ。」

でも、優斗がいるだけで、どんなに心強いことか。

「会いたい？」

「もちろんです！」

「じゃあ早く帰りましょう。」

「はー！」

優斗、今何してるんだ？

出発から2日が過ぎ、あと丸一日歩けば到着らしい。

すごい疲れた。足が棒のようとはじのことを言ひのだひつ。メアリーさんの足はほんとに棒のようなのに彼女自身はピンパンしている。こんなアリだらうか。

「はい、干し肉。」

「どうも。」

慣れといつものは怖いものだ。あんなにまずかつた干し肉が今は何ともない。

それはさておき、遠くに一つの黒い物体が見える、なんだろう。

「マサヤ、魔物が異常な行動を見せた理由が分かつたわ・・・」

「えっ、何ですか？」

「あの人影よ。あれが真犯人ね。」

「何ですかアレ。」

「アレはファイアラルと敵対する組織、ガーディアのメンバーよ。」

近づくにつれて、容貌がだんだんと明らかになつてくる。黒いマントを羽織り、フードまで被つてゐる。腰には・・・鞄。

「やる気ね。明らかに。」

謎の人間との距離が10メートルぐらいに縮まつた。そしてこいつ言つた。

「メアリー・ティーフ、その男は誰だ。妙な魔力を感じる。」

「さあね、あなたこそ誰よ。」

男はフードを取つた。男だ。

長髪で、整つた顔立ちをしている。身長は180くらいか？
剣を抜いた、バチバチと音を立てている。帯電しているようだ。

「マサヤ、ここは私が何とかする。せめて捕まらないようにして。
え？捕まる？ そう思ったとたん、男が魔物を呼んだ。砂漠から手が
伸びている5本だ。

「ケイファンよ。捕まつたらお終いよ。」

ウネウネと寄つてくる砂の手。キモ・・・

「さあ、覚悟はいい？ 男だから容赦しないわよ！ ヴォルカラシス
！」

炎の槍が出現。長物に有利な位置をとる。男はさせまいと、距離を
縮める。そして足を斬りつける。メアリーは飛んでよけつつ、頭部
を貫こうとする。男は右によけ、剣を切り上げる。剣の残像からも
稻妻が見える。

「当たるとまずいわね。」

いつたん退いて距離をとり、突きを繰り出す。すさまじい速度だが、
男はそれを、避け、剣で受け流し、すべて回避した。

メアリーは舌打ちした。異世界移動の際に、多くの魔力を消費した
ためか、思ったように力が出ない。男はそれでも容赦なく斬撃を繰
り出す。さすがのメアリーも、全力が出せないのでキツイ。
「どうした？ そんなものか？」

「くそつ！」

「俺はガーディア第4部隊隊長、グリフ・モーガンだ。」

「知るかつての！」

槍じやキツイわね・・・メアリーは槍を手放した。槍は消滅した。

そうね、相手は雷・・・ここは土はない、砂ばかり。何か・・・何

かないか？

そうだ！無属性なら・・・

「エルダージャベリン」

無属性、これは金属ではない。この武器がいつ作られたかは、メアリーも知らない。そこまで古いのだ。グリフが近づき剣を振りかぶる、メアリーは見逃さなかつた。正確に腹を突いた。男は不意をつかれ、後ろに吹っ飛んだ。血がポタポタと落ちる。致命傷にはならなかつたようだ。メアリーは距離を詰め、追撃しようとしたが、男は咄嗟に立ち上がり、後ろに下がつた。そして、

「女が・・・、来い！ボルティジ！」

男の前に魔方陣が現れ、そこから人型の猿が現れた。

「なんだ？グリフ。今回はやばいのか？」

「そんなんじやねえ、だが、俺一人じや無理だ。頼む。」「あいよ！」

メアリー、顔が面倒くさそうだ。

猿は拳を帶電させた。「いくぜえ、姉ちゃん。」

「死ね。糞猿が！」

メアリーらしくない言葉を放ち、猿と距離を詰める。だが、グリフが邪魔をする。非常に厄介だ。せめて、魔力が全快ならば・・・とメアリーは考える。

猿の拳が飛んでくる。槍の柄で受け流し、そのまま攻撃に転じようとするが、グリフが斬り込んでくる。これはダメだと後ろに下がる。

「ミロシアの魔物はあなたがやつたの？」

「ああ、お前に早く消えてもらうためにな。だが、そこの小僧、なかなかやるな。今のうちに息の根を止めておきたい。」「させないわよ・・・。」

一方、昌也は・・・

「チツ！何だこいつら！」

苦戦していた。蹴つても殴つてもすぐに再生するらしい。砂があつてこそだが。

「もつと、圧倒的な攻撃力が・・・そうだ！」

メアリーが使つていた槍を思い出した。できるか？

手に魔力を集中させてみた。しかし、ダメだ。ん？また光つた。何だ？

適当にケイファンを蹴り、手に魔力を更に集中させた。すると、パキパキと音を立て、手が変色していった。鉄・・・？鉄かはどうかまだ分からないうが、とにかく硬くなっていた。これなら・・・パン！

ケイファンが弾けた。が、再生した。前より小さくなっている。

「へつ！これなら銅の籠手もいらねえや！」

適当に籠手を投げつけ、小さくなつたケイファンを蹴る。すると、もう再生はしなかつた。

いける。

これに属性が加われば・・・だが今はしようがない。やるしかない。魔物は残り4体。魔物は何やら見つめ合い、何かを決断したように中心に集まつた。そして、融合した。

「おい・・・またかよ・・・」

大きい、10メートルはある、黒い竜より強そうだ。そしてまた手が無数に出てくるだろ？。

両手を硬化させた。魔物の形は手がそのまま大きくなつた感じだ。一気に間合いを詰める。魔物はグーの形をとつた。殴つてみたが少ししか削れない。防御力が格段に上がつている。その削つた砂は再生していない。だが、まだまだだ。

これを繰り返していれば勝てる。そう思つた。だが、手は、人差し指を俺に向けてきた。咄嗟に退いた。これは危険だ。人差し指から、圧縮された砂が発射された。

なんとかよけた。弾は小さいが速い。手は、中指も俺に向かた。まずい。

人差し指と中指から、無数の弾丸が発射された。

無数の弾丸が、俺に向かつて飛んできた。まずい、避けきれない。体の前を金属化させたが、全て防げなかつた。一二、三発貫通した。痛い。

メアリーさんは遠い。やはり俺がやるしかない。メアリーさんも相当ヤバそうだしな。

手は指を上にむけた。弾を装填しているらしい。力チャカ力チャといふ音が聞こえる。今だ！足に魔力を流し、手に急接近した。しかし、閉じていた小指に弾かれた。なんだこいつ！？

俺もその魔術とやらが使えたらな。

さて、どうする。敵は砂、発砲出来るし、近距離も十分強い。防御力も場合によつて高い。グーになつた時、何かできることはないか？目は手のひらの中だらう。

なら、グーになつたら背後に回ろう。パーになつた時の防御力は分からぬが、グーになるということは、元は防御力がそこまで高くない証拠だ。だか、あの手は360度回転するだらう。打てて三発だらうか。穴が空けばイイが。

ずっと沈黙してた俺に手が痺れを切らしたか、手を拳銃のようにした。新しいフォームだ。コレは強力だらう。

弾はデカかつた。そのためさつきのよりは遅い。かわして距離を詰めた。

殴りかかろうとした。グーになれっ！

だが、まだグーにはならず、小さな砂の手が伸びてきた。どつかの鍊金師じやないんだから。

どうやらこれを叩かないとグーになつてくれないらしい。仕方ない、

多いけどやうう。

足を取られたらマズイから、まずは足で下の手をける、砂が散る。何時の間にかでが顔の前まで伸びていた。慌てて払いのける。

左足で踏み込んで、左手で手を三つほど壊した。あと七つほどある。腰のあたりから左肩に向けて手が三つある。これは、右の蹴り上げで片付けた。

俺こんなに柔らかかったっけ？
まあいいや。

とにかく残り四つ。本体の指のほうで何かグニョグニョやつてる。時間がない！

残り四つ、左手で手を掴み膝で粉碎。右ストレートで左側の手首を打ち抜く。そのまま左の裏拳で右側の手を破壊。あとは適当に殴つて片付ける。指がこつちを向いた。

指がドリルになつてゐる…！

ズガアアアアン！

あつぶね～

間一髪でよけた。穴が空いてるし。

まだ空中でドリルがギュイィィイと音を立ててゐる。今しか無い。俺は手のひらに渾身の右ストレートを入れた。

砂が飛び散つた。返り砂？を浴びた。なんか臭いw

穴は空かなかつた。だが苦しんでゐる、それは分かる。右の足の裏で同じところを蹴る。まだ穴は空かない。もう一度右手に魔力を込めた。さらに光沢がました。

「うおおおああ…！」

拳が貫通した。再生してない！

指ドリルの回転力が少なくなつていいく。

最後の一撃か？ドリルが俺めがけて飛んでくる。遅すぎ。俺は華麗に避けようとした。だが、いきなり速度をあげた。そんな知恵があつたのか！

！

とつさに腕をだしてしまつた。ああ、もうだめだ。

アレ？

痛い？痛いだけ？

地面に穴が空いたほど攻撃だぞ？俺の腕が耐えられるわけ無い。だか腕はある。この金属？はここまで硬いのか！使える。そのまま力尽きたのか、手はボロボロと崩れる。

終わつた、また勝てた。

闘いか、悪くないな。むしろ楽しい。

師匠、ありがとうございます。

ありがとひやこめす。師匠、ここに連れてきてくれて。

・

・

・

・

あつひで砂が崩れてる・・・勝ったのね、マサヤ君

私もそろそろ終わらせなき。

「ケイファンがやられたか・・・せはり今潰せなければ。

「あなたの相手はこっちよー。」

槍で猿を牽制し、視線をグリフに向ける。

猿が槍を払いのけ、メアリーに殴りかかる。

「馬鹿ね。アンタじや私の相手にもならないわよ。どいてなさい。」

顔面に飛んできた拳を紙一重でかわし、腕をつかみ、引っ張る。そのまま膝で腹を打ちつける

「グフジー。」

猿はうずくまつたがすぐに立ち直った。

「なめるなよ、姉ちゃん?」

怒ったようだ。雷の量が違う。どうやら本気らしい。

「こくゼグリフ。ここにつけ殺す。」

「ダメだ、人質にとるんだ。」

やられる前提かい。

メアリーは若干呆れつつも、槍を構えた。腰を低くし、槍の先端をいつでも突き出せるようにする。猿が人差し指と親指で三角形を作つた。

「死にな。ボルトミサイル！」

3発の雷のミサイルが飛んできた。

「だから殺さないと言つてゐるだらうが。」

知るか。こんなんで死ぬわけねえだろ。

一発は避け、槍の尻、先の順に回転させて2発のミサイルをそれぞれ撃墜する。1発目のミサイルが返つてきた。ホーミングか。後ろに反つて避け、蹴りで打ち落とす。

メアリーは驚くほど冷静だつた。

ミサイルもかなりの速さだつたが、そんな短時間で最低限のことを考え、撃破したのだ。

どうしようか、このままだとジリ貧になりかねない。私も何か召喚したいところだけど、魔力が・・・。男もあまり魔力は残つていなはず、だから積極的に攻撃して来ないんだ。やっぱり、まずは猿を片付けないとダメね。

「やるな、そんならボルトミサイル」▽4！」

大きい。一倍はありそうだ。

メアリーも、エルダージャベリンに魔力を流す。

全部で6発。いけるか・・・

「黒金の閃！」

槍が空を切つた。きれいな一文字が現れた。

ドガアアアアアン！

ミサイルをすべて撃墜した。

爆風によつて、猿が吹つ飛ぶ。グリフが駆けつける。

「もういい、出し惜しみしてないで、MAXを出せ。」

「分かつてゐるつて、いくぜ！ボルトミサイルLVMAX！！」

今度は20発ぐらゝあるかしら。20発ね。

これだけの数を一瞬で把握するのは神業だ。

メアリーの目の前に20発のミサイルが接近する。

黒金の閃では防ぎきれない。

左に走る、もちろん追つかけてくる。

「はつはあ！これで終わりだ！」

仕方ない、魔力が少ないけど、これしかない。

エルダージャベリンが赤熱する。そして少し太くなる。

狙いはミサイル、18発！

メアリーの目が、さらに集中力を増す。

「黒金の焰！」

狙いどおり、18発のミサイルが跡形もなく消える。

「まだ2発残つてゐるぜえ？ミスか！」

メアリーは無視し、ふうと息を吸う。

手を前に出す。

直径30cm程のブラックホールのようなものが現れる。両手に現れたソレは、残りのミサイルを飲み込んだ。

「何！？どうなつてやが・・・グハアッ！」

猿が爆発した。猿の後ろにはメアリーが発生させたものと同じもの。そこからミサイルが出てきたらしい。

「ううう・・・」

猿はもう動けないだろ？。なんせ無防備の状態で後ろからミサイルを一発も食らったのだから。

男も、動こうとしない。わざわざ召喚獣に遠距離攻撃をせているんだ。奴は近距離専門だろ？。

猿の背中は無惨に抉り取られていた。鮮血が砂を黒く染める。男は歯軋りをしている。やつと力の差に気づいたか、馬鹿め。

「おい、グリフ・・・ダメだ。もう帰らせる。」

「くう・・・仕方ない。いつか駆りは返させてやる。それまでしつかり休んでおけ。」

男が何か唱え、魔方陣が猿の元に現れる。そして猿は、光となつて消えた。

「次はアンタね。」

男は仕方ないといった表情で剣を抜いた。一本目だと？。こいつは二刀流だったのか。

「ボルティジがやられるとはな、しかもこいつもあつたつと。次はこ

うはいかないと言つていてる。」

「また返り討ちよ。あんなの出でないほつがマジよ。」

冷たく言い放つた。

男は剣に魔力をこめた。後に抜いたほつの剣が紫色に光る。
剣を構える。

次の瞬間、剣がものすごい速さで伸びた。

剣が伸びた。

「クツ！」

しゃがんで避ける。金髪が頭上でパラパラと舞つた。

だが伸びた剣はうまく操れないらしい。だから猿を使ったのか。後ろに下がつたら不利だ。それに、伸びた剣は早くは戻らないらしい。ゆっくりもとの長さに戻っている。伸びる長さは自分で決められるのか？おそらくそうだらう。

左手に伸びる剣、右手には普通の帶電状態の剣。
なるほど、伸びる剣が戻る間、右手で時間を稼ぐ、か。

槍で剣が戻る前にと、素早く突きを繰り出す。だが、剣を駆使してすべてかわされる。

続いて、左手を前に出し、槍の尻で男の左側を大きく叩こうとする、男は隙だらけだといわんばかりの表情で左肩を突いてくる。メアリーの狙いはそこだった。咄嗟に左肩ごと左手を引き、その勢いで右手を出す。左はがら空きなのだ。

槍先の腹で、男を難ごうとする。だが男はギリギリのところで受け止め、右手の剣の一閃を繰り出す。槍の柄で防ぐが、体制を崩されてしまった。

まずい、これでは伸びる剣が！

「チツ！」

「喰らえ！」

「喰らわないわよ？」

メアリーは槍の柄で剣を受け止めた。

切つ先を細い円柱で受け止めるのだ。ほぼ不可能に近い。だがメアリーはやつてのけた。彼女の動体視力、反射神経、集中力には驚かされる。

「何だとおー？」

「あんたじや一生かかっても私に攻撃を当てられないわ。」「クソ……」

男の目が血走る。この女が！といった表情だ。

ハッタリに決まっているじゃないか。

私だつて避けられない攻撃はある。ただ怒らせたかったのだ。怒つて、判断力を鈍らせる。それがメアリーの狙いだった。コイツはその類だろ？

案の定、引っかかった。

叫びながら剣を伸ばした。上に。そしてその剣を下に振り下ろした。なるほど、こういう使い方もあるのね。だが、叫びながらなんて誰も当たるわけない。

剣の先は砂に埋もれ、それでも雷を帯びているのがわかるほど輝いている。砂が黒くこげる。

馬鹿ね。メアリーは呆れる。誰でもわかるほどわざとらしく言ったがこうも簡単に引っかかるとは。笑いがこみ上げる。そこまでプライドが高いのだろうか。ガーディアの連中にもプライドはあるんだな。

男は我に返り、今起こした行動に対して後悔していた。本当に当たらなかつた。畜生。

プライドも糞もない。本当の馬鹿だつた。ごまかすためにああいう口調をしていたのか、馬鹿だからこそその口調か。それは分からない。剣は相当伸びた。これを戻すには長い時間がかかるだろうとメアリーは確信した。

これで最後だ。と槍に魔力を再度流す。槍が細身になり、先が鋭くなつた。

槍を持ち替え、右手で尻を、左手を先のほうに添える。投げる気だ。

狙いは腹。さつき傷つけたところだ。大丈夫、私なら寸分の狂いなく命中させられる。

感覚をとぎ澄まし、目を閉じる。

男はメアリーが目を閉じるのを見逃さなかつた。

左手の剣を捨てて、一瞬で背後にまわろうとする。

メアリーの背後10メートルの地点にたどり着いた。足に力を入れた。メアリーはそのままだ。

今だ！グリフは猛スピードで近づく。

その瞬間、メアリーが振り向いた。

「！」

槍が投げられた。1mmもズレなかつただろう。男の腹を貫通した。

男は地面に倒れ、じくじくと流れの血を手で押さえ、メアリーに呟いた。

「何故！氣づかれていたというのか！」

「ええ、そうよ。最初から分かっていたわ。」

「心眼とか言つなよ！？」

「見てはいなけれど、空氣の流れのほうが人の位置を正確に把握できるからね。動き出しのときに、あなたがそこに着くことは分かっていたわ。」

「そんな、馬鹿な・・・」

メアリーは伸びる剣の元に近づき、拾つた。すこく重い。よくこの剣を片手で支えていたものだと感心する。この剣のことが気になつたメアリーは、男に聞いた。

「この剣、何か他の剣と違うわ。何なの？」

男の姿はなかつた。やられた、とメアリーは唇を噛む。まあ、あんなのいつでも倒せると思つたメアリーは、まあいかと開き直るのだった。

しかしこの剣、剣 자체が生きているような錯覚に陥る。やはり何かおかしい。私は剣の事には詳しくないからな。帰つたらガイに聞くとしよう。

二人は戦い終わり、合流した。

「はあ、疲れたわ。扉のことといい、魔力枯渇状態よ。」「何かスイマセン。」

遠まわしに俺に暴言言つてきた。

「なるほどね、魔力を流すことで体を硬化できる、ね。あのときの違和感はそれだつたのか。」

「金属かは分かりませんがとにかく硬いです。」「今できる?」

「そういわれたので魔力を流してみる。しかし、硬化しなかつた。」

「スイマセン。何か無理みたいつす。」

「まあ、あなたが嘘つくとは思えないし、そのうち見せてもらつわ。」

「はい。」

「それにしても、ケイファンなんて、どうやって倒したの?」

「硬化させて殴つたり蹴つたりしたら、再生しなくなりました。」

「なるほど、そういう効果もあるわけね。」

「師匠じゃ、途中で2対1でしたけど。」

「あんなのハンデよ。それでも楽勝ね。4対1でも勝てたわ。」
マサヤは絶句した。化物か、と言いたくなつた。

「ところでマサヤ君、硬化させたとき、何か気づいた」とはなかつた? 体が軽いとか。」

マサヤは思い出す、体がやけに軽くなつてきたことを。

「こつもより格段に体が柔らかくなりましたね。」

メアリーは顔をしかめる。何なのよ~と想つてゐるだらう。

「まあ、帰つて硬化させれば、どんな物質からできているかも分かるわ。普通の物質じゃないかもね。」

「あと2時間ぐらいで着くわ。さつきの戦いで結構時間を使つたから、早くしないと口が暮れるわ。」

「暮れたらダメなんですか?」

前の世界では、別に暗くても外にいたが。

「リリには魔物がいるでしょ?」

ああ、そうか。と納得する。

街が見える。ミリシアより大きい。

「ここにファイアラルがあるんですね？」

「やうよ。あと30分ぐらいね。路地裏にあるから分かりにくいで。」

街の中に入り、あたりを見渡した。ミリシアより広い。

10分程歩いて、大きな道路に出た。路地裏なんて無数にあった。これは面倒くさい。

「ここね。」

メアリーは迷う様子もなく路地裏に入つていった。

少し進むと風変わりのドアがあった。ここか。

マサヤが入ろうとしたとき、メアリーは隣の建物に入つて行った。危なかつた。

俺も急いで後を追つ。

中に入った。割と明るい。ソファーがあり、それを挟むようにテーブルがある。ここで依頼人の話を聞くのだろう。キッチンがあるが、1週間前から放置してあるって感じである。

「結局ここは何屋さんということでしょうか。」

「ジャンルは様々よ。危険な植物の採集、強力な魔物の討伐、場合によつては暗殺なんかもあるわ。」

「暗殺??」

「ターゲットを殺してもいいだけの人間と判断した場合だけね。滅多にないわ。浮気や暴力なんか暗殺の対象にはならない。悪徳者や悪い大臣なんかかな。」

「誰も何も言わないんですか?」

「依頼人には黙るという条件付で暗殺するから大丈夫よ。」

ほんと、何でもありだな。

? 「あつ、メアリーさん早かつたね。もう終わり?」

「ええ、ガーディアのせいだけね。」

・ 「ん、そこにいるのはじいさんの言つてた高校生。・ ・ ・ ・ ・

昌也! ! ! ! !

10話 再会

？「昌也……！」

？の人物は尻餅をついている。
恐る恐る近づく・・・

「優斗……」

尻餅はオーバーだが、親友との再会でそれどころではなかった。
優斗はいまだに起き上がれないでいる。
それでも

「待たせたな。」

「ああ、寂しかつたぜ。」

昌也は優斗を起こした。

二人で感動している。メアリーはそれを優しく見守った。

「優斗、お前ここにいつ来た？」

「丁度1年半かな。ここはいいぞ？」

それから一人の思い出話が始まった。

・・・・・

そのころメアリーは

「じいさん? 帰つたわ。」

「ああ、メアリーか。早いな。」

「ところで、例の少年。連れてきたわ。」

「おおー、うまいじゃん！」

「どうして話しかけます。

「連れて來い！」

「いいけど、昔の親友と盛り上がりがっているのよ?」

「知るか！はじめに話すのは俺だろうが！連れてこいやーーー！」

仕方ないわね・・・

「マサヤ？じこせんが呼んでいるわ。」

「あ、はい。すぐ行きます。じゃあ、後でな。」

「ああ、」

マサヤはつい残し、じさんとのりへ向かった。

「あの～スマセン。」

「よし、正座。やい。」

「え、あ、ハイ！」

いきなり？！

「私の名前はフォーレルニア・グウィルズ。マスターね。俺は見ての通りの年寄りだから、皆と同じようにじさんと呼びな。」

「は、はーーべつむ。」

「で、君の名前は？」

「始元豊也です。」

「マサヤか・・・ふしへなー。」

「はーーよしへお願ひします。」

「ヒカル、マウトとせ？」

「はー、マウトが消えるまで親友でした。」

「なるほど、君にも、彼にも何か異質なものを感じたんだが、どうだ?」

「まだ完全じゃないですが、硬化できます。肌を。」

「面白い。今できるか?」

魔力を流した。温かいものが流れるのを感じる。だが硬化まではいかなかつた。

「今は無理のようだな。また今度、じっくりみをせてもらひ。それで、いつなつたんだ?」

「砂漠でケイファンと戦つたときです。」

「ケイファン? いきなりそんなヤツと戦つたのか? ! メアリーは何をしていたんだ!」

「ああ、師匠はガーディア? のメンバーと戦つていました。」

「ガーディアか? ? あとでメアリーに話を聞こう。それにしてもケイファンに勝つたのか。硬化には再生を無効化する効果もあるんだな。 ん? 硬化の効果? マサヤ、俺は天才なようだ。」

俺もそれ考えたんだけど。

「ゴウトはどう戦い方をするんですか?」

「まあ、それはそのうち分かるだろう。彼は珍しい属性を持つていでな。魔術の上の長けている。これほどの逸材をとらないわけがない

い。
」

なるほど、昔からコウトは強かつたもんな。

「では、全メンバーを集合させる。それから自己紹介な。」

コウトによると、自己紹介は質問攻めにあつらしい。がんばれつ
見ると、ソファーガラフに増え、1つの椅子がある。そこに俺が座
るらしい。

7人？俺には6人に1匹に見える。

「失礼します。」

俺は椅子に腰掛けた。するとじいさんが

「では自己紹介」

パチパチパチ、皆やつてる。ふざけてるのか。

「えつと、皆元気です。よろしくお願ひします。」

「おｋおｋ、それでは改めて俺はフォーレルニア・グウィルズ。よ
ろしくな。次！」

「神崎優斗。ハイ！」

「メアリー・ティーフよ。ハイ次」

「ロイ・ベルデム。はいバス！」

「ライラ・パルキオプスよ。ようじぐ。次！」

「ガイ・ランドルフだ。ほい！次

「イグナム。フンリルだ。知恵はそここの馬鹿よりあるから安心し
る。」

ガイ「俺か！殺すぞ！」

イグナム「吼えるのはお前の仕事だーー！」

ガイ「吼えるのはお前の仕事だーー！」

じこさん「やめろ！」新人の前で無様だぞ。」

ガイ「うつせージジイ！」

じこさん「あ？今ジジイって言つたなー許されるのはじこさんまで
だー！」

メアリー「やめなよ、じこさんもジジイも変わらないわよ。」

ライラ「やつよ。面倒くさい。」

ロイ「新人が固まつてゐるじゃねえか。どうすんだよ。じこさん、さ
つと進めりや。」

じこわん「お前らマスターへの口の利き方ぐらじ・・・」

フオーレルニアはロイに抑えられていた。

メアリー「じゃあ代わりに私が進めるわ。1通り血口紹介は終わつたわね。じゃあ、質問タイムね。皆、準備はいい?」

皆うなづく。じこわんとロイも戻つている。

メアリー「じゃあ、開始!」

全員手を挙げた。ビハシ。

じこ「むつ、全員じやな。まあいい、」これはマスターの俺か「・・・

「

メアリー「前の世界で彼女はいたの?」
いきなりヤベえええ!

「え、えと、・・・いません。」

ライラ「うわー、かつここにじやんよ。」

俺は思わず口を向く。

メアリー「あははは!照れてる!」

ガイ「この中の男でこちまんかつじこのは誰だ!...」
なんて質問だ。

男・・・ロイわん、ガイさん、じこさん、コウトか、全員田が光つてこる。何でじこわんが光つてんだよ。ロイさんかな。

「ロイさんです。」

ロイ「おっしゃ——2連勝つ!」「
どうやらコウトのときも勝つたらしい。

ガイ「あとで覚えとけよ?」「
こいつを見ている。スマセン。

次は、

ライラ「マサヤ君、メアリーと私どもがいい?」

ふざけんな。俺に答えると?

二人とも20代の美女

メアリーさんは金髪のセミロング、身長は170ぐらい。D E力
ツブぐらい。

ライラさんは長髪の桜色の髪、身長は160ぐらい。C Eカップ
ぐらいである。

究極の選択である。まじめに考えてみると、コウトがこいつを見
笑っている。他のメンバーもそつだ。爆笑している。

メアリー「冗談よ!」

殺していいだろ?つか。

ロイ「男の中で、誰が一番強そつかな?」

これは

「ガイさんです。」

ロイ「俺のほうが強いのに！」

ガイ「寝言は寝て言えやー！」

いつもだが、複雑な心境になる。

イグナム「次だ。剣、銃、どっちがの方が好みか聞こいつ。
「銃です。」

即答。だつて強そうじやん。

イグナム「だとよ、ロイ。」

ロイ「お前とは気が合いそうだぜ、今度勝負な。」

ガイ「卑怯にも程があるぜ。」

じいさん「糞ガキどもが、身の程を知れ！まあいい、最後の質問だ。
お前はここに来たことを後悔しているか？」

自身を持つて言える

「はい。」

じいさん「よし、この少年をフィアラルへ迎え入れようじゃないか
！拍手」

パチパチ

ここで、俺の新しい生活が始まる。

その夜、

「なあ、コウト。おまえもこんな感じで入ったのか？」

「ああ、最後の質問で、俺も、はーーーって書いてファイナルの一員になつたんだ。」

「さうか、じゃあ改めて、これからもよろしくな。」

「まあ、せいぜい俺に追いつけるよつこな。ここでは俺が最弱だからな。」

「ならお前なんて楽勝だぜ？」

「」の野郎やつてみゆせ

・・・・

二人はその夜、遅くまで語り合つた。

ギルドメンバー紹介

今回はファイアーラルのメンバーを紹介します

ここでは位が高い順に載せます

名前：フォーレルニア・グワイルズ

年齢：65歳

身長：167cm

体重：57kg

説明：ファイアーラルの長。メンバーからはじいさんの愛称で親しまれている。最近は、年齢のせいで思つように戦えないが、その点を差し引いてもメンバーの中では最強である。よくロイとコントをする。戦いに関しては、何かを極めているわけではないが、メンバーと同じ武器で戦つたとしても、同等に戦うほどの達人である。口は悪いが、メンバーのことを本当に愛している。

「死ねえ！！糞ガキ共がああ！！！」

名前：ロイ・ベルデム

年齢：28歳

身長：184cm

体重：65kg

説明：銃の使い手。膨大な魔力量と属性を持つが、魔術にはあまり適していない。だが、使えるには使える。特別な銃は5つほどしかないが、ノーマルなものと合わせると数は計り知れない。かなりのコレクターで性能が低くとも、プレミア品となればたとえ遠くとも買いに行く。銃には魔力を弾として扱う。拳銃サイズのものから、

スナイパー用のものである。じいさんとよくコントをする。どちらかというと、正々堂々ではない。全属性使えるが、コウトの持つ特別な属性は使えない。

「お前らなんで銃のよさが分からねえんだよー！」

名前：メアリー・ティーフ

年齢：25歳

身長：172cm

体重：0kgらしい

説明：マサヤをこの世界に連れてきた張本人。好物は肉だが、太っている様子はない。結構巨^ヒ爆。槍を使い、普段は体術を使う。マサヤの師匠である。ここでの料理はすべてメアリーが行う。肉が中心である。メンバーの中で唯一空間移動を使うことができる。属性は、火、水、土

「ライラ、肉食わないからすぐバテるのよ。」

名前：ガイ・ランドルフ

年齢：22歳

身長：181cm

体重：67kg

説明：剣の使い手。剣を一本持しているが、本人は、あと一本ぐらい欲しいらしい。ロイのようにコレクターではないので、自分の気に入った剣しか持たない。とても好戦的な性格で、戦争のときは真っ先に駆けつける。師匠がいたが、すでにこの世にいない。属性は火、雷、氷、水

ライラ「何であんたこんなに属性あるのに魔術師になんなかつたの？」

ガイ「剣のほうが楽しいじゃねえか！魔術だつてちゃんと使うわー。」

名前：ライラ・パルキオプラス

年齢：25歳

身長：165cm

体重：あなたよりは軽い

説明：メアリーとは同じ年で、同時にファイアラルに入った。属性が珍しく、量も多い。ただ、スタミナがないのが弱点。召喚獣を多数呼び出し、護衛させながら、自分は大型魔術を連発するという豪快な戦法をとる。短期決戦派である。長引いたら、召喚獣に適当に任せせる。プロポーションを気にしているらしく、メアリーと違つてあまり肉は好まない。全属性使える。

ライラ「メアリー、ガイが私に変態なこと言つてくれる。」

ガイ「何で静まり返つてる中で言つんだよー！しかも言つてねえよー。」

名前：イグナム

年齢：248歳

身長：？

体重：？

説明：強力な魔物、フェンリルで、じいさんと決闘して負けたらしい。じいさんだけには敬語で話す。普段はペットだが、戦場では、フェンリルらしい、凶悪な無双ぶりを發揮する。属性は闇。他にも幻術を使う。

「じいさん。無理は禁物ですぞ。お前らは存分に無茶をしろ。ん？あつ、頭撫でんな！」

名前：神崎優斗

年齢：17歳

身長：173cm

体重：57kg

説明：マサヤの同級生。マサヤより早く、このファイアラルに引き抜かれた。特別な属性を持っているというが、詳細は不明。

ゆ「マサヤ、あの店には可愛い子こいつぱいいるや。」

ま「ナイスだ。今すぐ行こ。」

名前：岩元昌也

年齢：17歳

身長：175cm

体重：58kg

説明：この作品の主人公。神崎優斗の同級生。同じくファイアラルに引き抜かれる。まだ検証されておらず、確実ではないが、硬化ができるという性質を持つ。その異質で膨大な魔力にじいさんが気づき、メアリーにつれてくるように頼んだ。だが、魔力が多くても魔術に適してはいないということで、メアリーには体術を習い、これからも教えてもらう予定。属性は火、雷、氷、土

「なあ、ユウト。前のお前の彼女が新しい彼氏作ってたぞ？」

「…まじすか…！メアリーちゃん！殺したい人がいるんですけど前の世界…」

俺は口を押さえた。

マサヤがフィアラルに加入してから1週間がたつた。
マサヤは、その1週間、メアリーの指導を受けていた。
メアリーに組み手で勝つことはなかつたが。
だが、確實に腕は上がり、前みたいに一瞬でケリがつくようなこと
はなくなつた。

「マサヤ、もひと腰低くしなきや～、顎も引いて、足は肩幅一隙は見せつけやダメよ～。」

「うへ、一週間もたつてゐの……」

「まだ硬化できないの？」

ええ、確かにあの時なつたんですけどね。

「早く見たいわ、どんな物質に変わらのかしら。」

メアリーは宝石を見る気分だが、実際そんな綺麗なものではなく、色の濃い銅のようなものだ。そのうち変わるかもしれないが。

「おこマカヤ、どうだ？ 少しだけでもうけたか？」

「あ、ガイさん。どうも、まだまだですよ。」

そのときメアリーは何かを思い出したかのよつて、部屋を出て行

つた。2人ともなんだろうと思つたが、メアリーが戻り、マサヤは納得し、ガイは驚いた顔をしていた。

「これ、何かしら。」
メアリーは、いつか戦つた男の剣を差し出した。それを受け取つたガイの手は震えている。

「「これは……魔剣……か？」

「「魔剣？」」

「ああ、魔剣というのは、良質な剣に魔物が住み着いたものだ。魔力が小さいもの、気が弱いものが触るとそれだけで喰われる。」

「そんなどい剣だつたのね。あの男、なかなかやるのね。で、ガイ。この剣どうするの？」

「俺が使う。」

は?と2人とも口をあける。

「ちょうど畠にあつた剣がなかつたからな。これで戦略の幅が広がつたぜ。」

「中の魔物は?」

「んと、んん、ボルティイジ?」

メアリーは苦笑した。まさか剣から召喚してたなんて。

「ガイ、出せる?」

「今はダメだ。傷を負っている。今出せば死ぬかもしれない。」

「その傷、私がやったんだけどね。」

メアリーは申し訳なさそうにしていた。

「『』の剣何気に重いな。まあいい、じっくり観察します。」

「じゃあ、マサヤ。今日はもうこいわ。自由にしてこよ。」

「はい、ありがとうございます。」

ロイ「なあ、じこわん。」

じい「何だ？」

ロイ「クラウから聞いたんだが、ジーラットが動き始めたみたいだ。」

じい「ほほつ、あの兵士400人持つの闇ギルドか？」

ロイ「ああ、そのギルドが、ハーピィを攻撃しようとしているらしい。」

じい「むむ、正ギルドのハーピィなんかじゃ太刀打ちできねえだろ
うな。」

ロイ「依頼があつたんだ。ハーピィのマスター、プロッサムに。」

じい「内容は？」

ロイ「ジニアットを止めて欲しいことだ。」

じい「さすがハーピィだ。潰せじやないんだな。」

ロイ「で、どうすんだじいさん。俺はいつでもいいぜ？」

じい「そつだな、ジニアットが動くまでじんだけあるか分かるか？」

ロイ「1週間ってところか？」

じい「なら、5日後に総攻撃だ。先にコウトを送つて破壊工作をさ
せよ。」

ロイ「目標は？」

じい「ジニアットを4年間行動不能にすることだ。」

ロイ「ならば、マスター、幹部は確実に始末しましょう。」

じい「ああ、それと、ハーピィから援軍はもうえねえか？」

ロイ「その件ではもう話しあつた。援軍は、マスターのプロッサム、

他ベスト3が来るらしい。それでいいか?」

じい「ああ、十分だな。」

ロイ「じいさんは出るか?」

じい「ジニアットはそこまで強大ではない。お前らで何とかしろ。」

ロイ「まあ、楽勝だが、最近ストレス溜まつてんじゃ・・・」

じい「溜まりまくってるわ、ボケ。腰が動かねえんだよ。今度整体院行つて来る。」

ロイ「そつか、じゃあ作戦は俺が決める。いいな?」

じい「ああ、勝手にしろ。」

ロイ「なら俺が作戦を決める。いいな。」

ジイ「ああ、勝手にしろ。」

ロイ「見てるよジジイ。俺が最強ってこ見せてやる。」

ジイ「銃撃戦で俺にも勝てないくせに威張るなクソが。」

ロイ「腰がイタイイタイなジジイに負けるか。」

ジイ「ビリでもいいから、ひとつとガキ共集めて作戦の説明しろ。」

ロイ「あこやー」

（会議）

ロイ「ええ、まず敵はジニアット、味方はハーピィ。おぐっ。」

皆「クソとつなづく。」

ロイ「そしてジジイは腰痛で行けません。じつとしてるよジジイ？」

？

じい「死ね！イケメンが！顔面潰すぞ！」

ロイ「あなたのような人間は私の半径1メートルに近づいただけで消滅します。」

じい「あああ！！腰いーさつさと動けえやーー！」

2人は、10メートル以上離れた場所で会話していた。

ロイ「続きだ、ハーピイからはマスターのブロッサム、他3人来るらしいが、まだ決まっていない。そのうち連絡する。5日後、ハーピイの連中を含め、ジニアットを攻撃する。4年間再起不能にすることが目的だ。マスター、幹部クラスは確実に始末する。」

メアリー「で、作戦は何なの？」

ロイ「ああ、ユウト。4日後にジニアットの基地に破壊工作してくれ。爆弾は全部で10個、変なところに隠すなよ。」

ユウト「分かりました。じゃあ、仕掛けるところは、トイレに爆弾を5つ分、倉庫に2つ、集会所に2つ、あとは管制室に1個ですかね。」

ロイ「トイレはいい、他には、最上階に適当に1個、集会所にもう1個、残り3個は兵士格納庫だ。それでも兵士は全滅しないだろうが。」

ユウト「分かりました、4日後ですね。」

ロイ「ああ、頼む。それとマサヤ、お前の硬化とやらは使えそうだ
から、5日後までに何とか完璧に使いこなせるようになつて欲しい。
」

マサヤ「分かりました、がんばります。」

ロイ「それと、救いよつのない馬鹿だが、何か剣増えたらしいな。
使えるか?」

ガイ「まだだ。だがそれは住んでる魔物が弱つてゐるだけで、そのう
ち使えるよつになる。」

救いよつのない馬鹿に反応しなかつた。自負してゐるのか?

ロイ「メアリー、約1週間、肉料理は少し抑えて、健康によい食事
に変えるよつて、空いてる時間は自力で魔力をねつてくれ。」

メアリー「・・・分かつたわ。じゃあマサヤ、あなたもそつき言わ
れたとおりに硬化を使いこなせるよつにしなさい。」

マサヤ「心得た。」

ロイ「次、ライラだ、お前は肉食つて、後はメアリーと回じだ。あ
と、サプリメント飲め。」

ライラ「うん、結構魔力使いそつだし。」

ロイ「イグナム、お前は何でもできるが、幻術を使つて400人に
及ぶ兵士に集団催眠をかけひ。そして、できるだけ動きを止め。」

イグナム「つまらんな。」

ロイ「文句言つた。」の犬が、あそこには弾ぶつ放すぞっ。」

イグナム「俺も幹部とかとやりたいんだが、」

ロイ「前やりせてやつたろ？ それもつまらない戦いだつたじゃないか。」

イグナム「チツ」

確かにそれはつまんねえだろ？ ウズウズするつて。

ロイ「イグナムを除いてこれは準備の段階だ。今から本戦の作戦を説明する。いいな。」

イグナム以外は頷く。

ロイ「ジニアットのマスターは俺とブロッサムが叩く。あとは適当に会つたやつとやれ。だが、幹部クラスの敵の数は分からぬ。皆、携帯は持つているな？ 誰かから何か聞き出せたら連絡を取れ、いいな？」

ガイ「とにかく、ジニアットとハーピィって何なんだ？」

メアリー「ジニアットは闇ギルド。不正ギルドのことね。最近妙に調子乗つてゐる。」

ライラ「ハーピィは、討伐よりも、採集や貿易が盛んなギルドよ。だけどマスターはそんな弱いギルドを守るために、毎回強いわ。ブ

ロッサムももちろん強いわ。」「

ロイ「俺とブロッサムがやるんだ、マスターは安心しろ。問題はマサヤだ、お前は誰かについていけ。」「

メアリー「そうね、じゃあまた私が受け持つわ。」「

マサヤ「了解です。」「

ロイ「それとユウト、お前はガイと行動しろ。剣が怪しいからな。もしものときは頼む。」「

ユウト「はい。ですよ、ガイさん。」「

ガイ「ああ、頼むぜ。」「

ライラ「で、私は?」「

ロイ「お前はハーピィの2人だ。あと一人はイグナムの手伝いだ。ハーピィは回復系統が多い。ブロッサムは超攻撃型だがな。そいつなら魔力回復も行ってくれるだろう。」「

ライラ「分かったわ。それなら安心ね。」「

イグナム「いらねえし、人間なんて。」「

拗ねている。ロイは無視する。

ロイ「これで一通り終わったな。もう一度言つ、作戦決行は5日後。ユウトは4日後ジニアットに破壊工作をする。ガイとユウト、マサ

ヤとメアリー、ライラとハーピィ2人、イグナムと残りのハーピィ、俺とプロッサムで行動する。ハーピィのメンバーは後日連絡する。以上だ。何か質問は?」

ロイ「ないようだな。さすがは俺の完璧な説明。それじゃ解散。」

皆はそれぞれの課題にとりかかった。

作戦決行まで5日

13話 ハーピイメンバー

ジニアツトを攻撃する作戦の会議から3日目だ。

ユウトは明日に作戦を開始するので念入りにイメージトレーニングをしていた。

そんな中

ロイ「おい、お前ら、集合だ。ハーピイの連中が来たぞ。」

ガチャリとドアが開き、入ってきたのは4人の女性。1人だけ特に美しい。

ロイ「聞こえねえのか？集合。」

皆ダラダラと集まる。

ロイは、ハーピイの人たちに謝っている。気を悪くしないでくれ、と言っている様だ。

皆は、そんなロイを見るのが楽しいのだらう。

ロイ「はい、じゃあ我々がジニアツトを攻撃するにあたり、ハーピイから援軍が来ることは説明していた筈だ。それで、4人に来ていただいた。すみません、自己紹介お願ひします」

ブロッサム「ええ、もちろん。私はブロッサム、ハーピイのマスターよ。久しぶりに戦えるわ。皆ニフよろしくお願ひします。」

マサヤ（ハーピイのマスターが好戦的って……）

シユバリヒ「私はシユバリヒ、今回はライラさんと一緒に行動させていただきます。どうぞよろしく。」

リップ「リップです。私も同じくライラさんのサポートをさせていただきます。よろしくお願いします。」

二人が深々と頭を下げる。ライラも会釈する。会釈かよ。

サフィア「サフィアです。今回はイグナムさん……アレ?」

イグナム「ここだが?」

サフィア「ああつースマセンーでも、ちゃんと役に立ちますー。」

イグナム「……」

また拗ねた。メアリーが頭を撫でると怒り出す。

ロイ「サフィアはイグナムと相性のよい魔術を使うんだったな。お前も幻術か?」

サフィア「いえ、私は幻術は使えませんが、幻術を具現化することができます。つまり、イグナムさんが誰かにドラゴンに襲われているという暗示をかけます。そうすれば、私はその人からイメージを汲み取り、ドラゴンを召喚します。しかし、長くは顕現していられません。10秒が限界です。」

ロイ「だそうだ、イグナム。」

イグナム「少しばらうよつだな。足手まといにはなるなよ。」

サフィア「はいっ！」

ガイ「なあ、ロイ、ブロッサムってヤツ滅茶苦茶強いんだろ？ほんとかよ？」

ロイ「メアリー、魔力はどのくらい元に戻ったんだ？」

メアリー「やつと半分ね、まああと一日でほぼ全快よ。」

ガイ「あの、ロイさん？」

ロイ「ライラは？」

ライラ「私はもう十分よ。今からでもいけるわ。」

ロイ「ならよかつた。」

ガイ「ねえ、ロイさん？きいて……」

ロイ「シユバリエ、リップ、お前たちはライラの魔力が常に全快であるようにさせてくれ。」

2人「分かりました」

ガイ「ねえ、……」

ロイ「ブロッサムさん、あなたは私と行動です。よろしいですか？」

ブロッサム「ええ、がんばりましょ！」

野郎！人

人の話くらい聞いてやれよ！！！」

血分のことがヨミとマサヤは思つた。

「ロイ、マサヤ、どうだ？ 硬化はモノにできたか？」

マサヤ「ええ、2回に1回は成功します。」

「そうか、じゃあ依頼が終わつたら披露だな。そのときに他の奴らのも見せてやる。あれ? ガイ、どうしたんだ? そんなに疲れ切つて。」

ガイ「何でもあらへんよ・・・」

投げやりになつてゐる。しかもなぜか話し方も変わつてゐる。

田舎へ戻る準備はついていか?

「カエホニ、いつでもいけます。

「ではブロッサムさん、作戦は明後日です。明後日の早朝、ここにもう一度お集まりになつてください。」

ブロッサム「分かつたわ。」

「では、これで決定です。また明後日会いましょう。」

ハーピィの人たちはドアを開けて帰つていつた。

ロイ「これはチャンスだ。俺としても、じいさんとしても。
イとは友好を築きたい。ミスは許されない。いいな?」
「

14話 ノウトの先攻

4日目、朝3時、ノウトは起きた。

「いよいよだな・・・。つまくいってくれよ?」

ノウトは自分の手を握り締める。

「行くか。ロイさんが地図を確か「ココ」・・・あつた。」

東に10キロ、以外と近い。

「今回も頼むぜ?ヴェステアーロン!」

大型の鷹のよくな獸が現れた。全體的に色が暗い。ノウトの1・5倍くらいの身長がある。

「お、ノウトじゃねえか。2ヶ月ぶりか?久しぶりだな。」

「ああ、今回はジニアットに行く。東南東に約10キロだ。」

「任せな、乗れ、早く行くぞ。」

「ああ、頼む。」

ヴェステアーロンは巨大な翼をはためかせる。風圧がものすごい、家も吹き飛ばしそうだ。背中にノウトを乗せたヴェステアーロンはジニアットを目指して飛び立った。

ロイ「ユウトは行つたな。よしよし、任せたぞ。」

メアリー「あの子の能力はほんとに使えるわね。私も欲しいわ。」

マサヤ「ユウトはどんなことができるんですか？」

ロイ「ん？あ、そうか。ユウトはね、聞いたことない属性だが、影属性というものを使うことができるんだ。影属性というのも、俺らがつけたんだけどな。能力は、影を伸ばしたり、実体化させたりなどどれも強力極まりない。それを見つけるじいさんの目も脱帽だよ。あれは100万人に1人の逸材だ。」

なんか巨人的なこといつてる。

マサヤ「そなんですか。でも影つて・・・」

森の上を飛んでこるが、まだジニアッシュのものは見あたらぬ。

「なあ、間に合つか？あと少しで朝だぞ？」

「ああ、ぴつたりだ。お前は影が無いとダメだからな。朝になつた瞬間にちやちやっとやんなきやな。」

「あんまり遅いと気づかれるからな。」

森を越えると、黒い建物が目に入った。デカイなんじやありや、爆弾10個で足りるか？まあ、ロイさん特製だから侮っちゃいけないだろうけど。それにもこんな握り拳くらいのちやつちい爆弾がねえ・・・。

「ゴウト、あれじゃねえか？」

「ああ、想像以上にでかいな。最上階は何回だ？7階か？兵士格納庫も馬鹿でかいぞ。」

「はい到着～。」

「ありがとな。ヴェステアーロン。どつか隠れててくれ。」

SHIMADA

「ハハハハハハハ

手が光った！ まだ。 確実に上達している。 こしても硬いな。 神経
通つてんのか？

明日までになんとか完成せねば・・・。 つまへこなばここなば。

SHIMADA

ここか、 真っ黒だ、 しかも結界が張つてある。 なるほど、 誰にも気
づかれないわけだ。 ロイさんはどうやつたんだろ。 あ、 じいさんか。

爆弾を鞄から取り出し、地面に並べる。あと少しで陽が出る。出た！

「ブラックミスト」

影が霧散し、爆弾を包む、真っ黒に染まつた爆弾は宙に浮いた。

۱۲۳

爆弾が一斉に飛び立つた。1つは頂上、倉庫に2個、集会所に3つ、管制室らしき部屋に1つ、残りは兵士格納庫へ、それぞれ飛んでいった。

コウトは目を閉じ、爆弾に意識を憑依させた。

いすの下に仕掛けた。倉庫はもう仕掛けた。集会所、1人がこっちに向いた！まずい、俺は爆弾で男を殴つた（ユウトは外にいる）。男は倒れた。ダメだ、やりたくはなかつたが殺すしかない。爆弾を包む影の1部を尖らせる。不安定になるが仕方ない。勢いよく男の胸を貫く。男は苦しみ、息絶えたようだ。やつてしまつた。男の胸からは血が噴出し、床を染める。すまない、本当は明日の予定だつたけど。いやあ、血が垂れてるな。仕方ない、この上にするか。上の目立たないところに爆弾を仕かける。あとは台所と掲示板の裏だ。あとひとつ、最上階に仕掛けた。柱が脆うなところに。一気に崩してくれよ？

コウトは意識を戻した

「ふう、一人やつひまつたか。しうがねえな。それにしても、もう何の罪悪感も残らねえな。俺も変わったな。」

「ヴェステアーロン、帰るぞ？」

「終わつたようだな。ああ、帰ろう。」

ヴェステアーロンは、俺が影属性をモノにしたときに現れた俺の召喚獣だ。

「完璧とまではいえねえが成功だ。」

コウトはヴェステアーロンの背中に乗り、飛び立つた。フィアラルに向かって。

「で、できた・・・！」

マサヤの腕は輝いていた。

SHADEマサヤ

「できた . . . !」

マサヤの腕は光沢感が出て、いかにも硬そうだ。メアリーは近くにいたので、すぐに気がついた。

「！ やつたわね、いつもと光り方が全然違うわ。これなら明日は大丈夫そうね。」

メアリーはそういう、ロイの元へ向かった。

やつた、ついに硬化をものにした。これは本当に硬い。普通の人間じゃ、1パック殴つただけで意識が飛ぶだろう。なんせ、ドリルまで耐えるのだから。

ロイ「ほう、これが硬化か。確かに硬そうだ。だが . . . ほい！」

腕の一部が簡単に崩れた。崩れたと言つてもほんの×2少しだが。ロイ「はははは！ 魔力には強くないんだな！ ちょっと待つて。すぐ鑑定してやる。」

マサヤの腕の一部はロイに持つてかれた。硬化を戻すと、そこは擦り傷みみたいになつていて。血も出でたし、だんだんと痛みを感じてくる。え？ 硬化つて大したことない？ いやいや、そんなことはない . . . よね？

まあ、でもこれで格闘技を有利に進められる。

ロイ「マサヤ、俺はこんな物質見たことねえ。金属だが、金属ではあり得ないような強度を持ち、それなのに魔力装甲がなく、また張ることもできない金属なんて。」

とここん魔術はダメみたいだな。

ロイ「おいーガイーちょっと来い！頬みがある。こいつの腕を剣で叩き落してくれ。魔力はなしだ。」

ガイ「！？いいのか？」

マサヤは嫌そうに頷く。だつて痛いもん。斬れないことは分かってるけど、衝撃は多少軽減されるが、無いわけじゃない。まえのドリル攻撃ではそんな感覚だった。

ガイ「斬れても悪く思つなよ。ラアッ！－！」

ガキイイイン！

マサヤ「痛つてーーー！」

腕に外傷は無いが、確かに痛そうだ。皆は苦い顔をしている。

これ、やっぱ使えんじゃねえ？しかも、まだなんかある気がする。

SHIDEコウト

あと30分くらいか．．．今回は1人殺つてしまつたが、前は7人だからいいほうだろう。バ lenaきやいいが。まあ、トイレは見破られないだろう。ちなみに、あの爆弾は、人間が触ると爆発する。また、ロイさんの合図でも爆発するようになつていて。誰かが、何だこれ。と手にした瞬間あほんだ。

さらに、一つ爆発すると全部爆発する。名にも出来ずに見てるしか出来ないだろうな。

予定では、今日中に爆弾が作動する。あくまでも人間が触れたら爆発だから、獣や魔物が触れたつて爆発しない。まあ、処理する方法はない。ロイさんが来いと言つたらくる爆弾だからだ、解散は出来ないらしいけど。

ロイ「くつ一ダメだ。魔力装甲が全くかからない。ある意味これダメじゃね?」

マサヤ「え、でも自分から魔力は流せますよ?」

ロイ「だが装甲は作れないじゃないか。つまり、魔術が弱点という事だ。」

この世界でこんな能力・・・何か、魔力無限とか、超珍しい属性がたくさん使えるとか、がよかつたなあ。

まあ、金属もかっこいいよな笑

ロイ「だけどそれも特別なんだぞ?俺はそんなの見た事無いからな。ちゃんととした利用法を考えろよ。」

特別?俺の厨一病がドクンと脈打った。ちゃんと奥義とか作りつ

「はあ、ここの訓練意味わかんねえよ。」

ジーマジアードのある兵士らしき人が愚痴を言いながら、なんとかつき爆弾を仕掛けたトイレへと入って行った。

「ふんんこゆうづーああ出た。ふう、もうこの兵士めめうかなか面倒だし。マスターは俺らの事どう思つてんだ。」

「えつと、ケツ拭いて、流す……アレ? なんだこれ、ん?」

ウンコマンは、近くにいる友人を呼びに行つた。

到着したウンコマンズはその爆弾らしきものをマジマジと見つめた。はたして、触つてもいいだろ? かと。すると、ウンコマンズAが誰か持つてみて、と言つ。ウンコマンズABCDEは皆顔を見合わせ、首を振る。先程ウンコマンになつたCが、仕方ねえなど、手を伸ばす。それをウンコマンズはマジマジと見つめる。トイレの中で、ウンコマンズが5人。しかも糞を処理するようて、爆弾らしきものを処分する。なんとも滑稽だ。

「じやあ行くぞー、……よつと。へ、うわああ~。」

ドカアアアアアン?

ABCDE」おおあああー?」

ウンコマンズは

その爆発をもろに食らつたので当然木つ端微塵になつた。

同じく、他の場所でも爆発が起つた。

マスター「いよいよ攻めてくるのか。でもここまでしなくても。泣

SHD Eコウト

あ、早え、もう爆発してやがる。

「ヴェステ、爆発したみたいだ。」

「え、早。どんだけだよ。大したことねえじゃん。」

「いや、それだけじゃ分からねえだろ。どつかのバカな集団がやつたんじゃないの? でもあれが爆発したなら100人は死んだよな。」

トイレかなー、

トイレかなー、ワクワク

「着いたぞー」

「ああ、ありがとな。」

「コウト」「ロイさん、終わりましたよ。コウト君帰りましたよ。」

「ロイ」「ああ、つうか何だお前その口調は。」

「コウト」「爆弾は既に爆発しました。」

「ロイ」「そつか、じゃあお前は寝ろ。」

ジーマット攻撃まで

1日

作戦決行日、朝4時

ロイ「起きたか？皆。」

皆格好がいつもと違う。

ロイさんは、青色のマントを羽織り、腰には3丁の銃。背中には銀色のボディに銃口にバレルのようなものを取り付けたショットガンを背負っている。腰の3丁の銃は、よく見えないが、異様なものを感じる。おやぢられらが、靈獸、魔銃と呼ばれるのだろう。

メアリーさんは既にエルダージャベリンを出現させている。その他、準備可能ようだ。

ライラ「あとはハーピィの人たちだけね。」

ライラさんは、桜色の髪を、ポニーテールにしている。メアリーさんといい、ライラさんといい、タイプは真逆だけど美しい。

ブロッサム「入るわよ~」

ロイ「来ましたか。もう私たちは準備が整っていますが、貴方たちはもう出発してもよろしいでしょうか。」

ブロッサム「ええ、行きましょ~。」

各自外に出る。

ロイ「じゃあプロッサムさん、何か鳥獣型の魔物や精霊は召喚できますか？」

プロッサム「ええ、当たり前よ。私たちはそれに乗るわ。クライイン！」

雷を纏つたフクロウが現れた。頭にはズレているが「冠をかぶり、首や尾には装飾が施され、背中にはジェットコースターにあるようないすが並んでる。2メートルほどの大きさで、薄い緑色をしたフクロウは4人を乗せた。

ロイ「ハーピィは大丈夫なようだな。それにしてもすごいな。あの大きさのフクロウを召喚するなんて。」

ガイ「どうでもいいから早く出してくれよ。」

ロイ「ああ、そうしよう。コウト、何人いける？」

コウト「4人ですね。」

ロイ「分かった、じゃあコウトにはマサヤ、メアリー、ライラが付いていけ。」

ロイ「残りは俺について来い。頼むぜ、麒麟」

魔方陣から馬より少し大きいくらいの首の長くないコニコーンが現れた。足からは赤い炎を出し、尻尾はもはや炎だ。全身が赤い麒麟

は2人と1匹を乗せた。

ロイ「じゃあな、じいさん」

3匹の召喚獣は飛び立った。

メアリー「着いたわね」

そこには、見るも無惨な黒い建物、ところどころ大穴があいていて、たまに赤が見える。血だろう。

ユウト「おわ〜、スゲ」

ロイ「ここからは前言つた組で行動してもらつ。いいな? 誰一人として欠けてはならないのがフィアラルだ。ハーピイを守るとともに、

生きて帰つて來い。まだ16話なんだぞ。」

マサヤ「16話?」

ロイ「解散~」

sideイグナム・サフィア

さ「すごい数の死体ですね。」

い「あの爆弾は強力だからな。作戦を始めよ。」

イグナムは普段の子犬サイズから一気に大きくなり、背中が人間の頭ぐらいの高さまでになった。サフィアは呆然としている。

い「ダーク・ゾーンを張る、その間にお前は片つ端から具現化させてくれ。中身は死神だ。」

さ「死神ですね。まあ言ってくれなくてもよかつたんですけど、こっちのほうがイメージを掴みやすいです。」

い「準備ができたよだな。ダークゾーン!」

イグナムを中心として、薄黒い波が広がつていいく。それに触れたものたちは、いきなり何かを見つけたようにビクッとなり怯えるようにして後ずさる。

さ「かかりましたね。夢幻地獄。」

サフィアの表情が変わった。あんなに明るい顔をしていたのに、沈みきつた顔をして、目が濁っている。

イグナムはサフィアの魔術に驚いていた。自分の想像していた死神がそのまま現れたのだから。骸骨に黒いマント、鎌を持つものもいれば、銃を持っていたり、杖もいる。すごい、これがサフィアの魔術か。想像以上だ。

さ「イグナムさん、多分、この人たち皆死にます。弱すぎますって。

「

s i d e ガイ、 ユウト

ガイ「つまんねえな。どいつもこいつも、雑魚過ぎるぜ」

ユウト「そうですね。何かどでかいの来ませんかね。」

ズガアアアアアン！――！――！

「「――」」

壁が突然爆発し、その中から、3頭の魔物が現れた。その後ろには、人間。

「へへ、俺らのギルドをこんなにしゃがって、殺すからな。」

楽しそうに躍つゝ身長150センチくらいの科学者らしき人物が現れた。

ガイ「俺らも退屈してたんだよ。」

コウト「来ましたね、ほんとに、」

この2人も楽しそうだ。

魔物が3体。赤、青、黄色の鬼だ。角がそれぞれ2本ずつついていて、目が光っている。赤は棍棒、青は剣、黄色は弓を持っている。しかも身長がガイの2倍くらいある。

「私の名前は、サウスター・アリッジ。このギルドの最高科学者です。そして、第2部隊隊長でもあります。うへへ」

ガイ「鬼か、強そうだな。ちょっとだけ」

コウト「いや、もつとちょっとじゃないですか？」

サウスター「君たち、誰が3体といいました？奥をご覧なさい。」

「――――」

奥には鬼が約30体。その奥には一番テカイ黒鬼がいる。

コウト「これだけ多くの鬼を従えるつて、お前……何者だ？」

サウスター「全部私が改造しました。まあ、なに言つてるか分かりま

せんよね。」

ガイ「改造くらいい分かるつて。」

sideロイ、プロッサム

2人は所長室へと向かっている。そんな時、「ちよつと待ちなあ、いい感じのお一人さんー。」

プロッサム「誰？殺すわよ？」

「おお～怖え、俺の名前はボシキ・リヤン。第4部隊の隊長だあ。」

赤く短い髪に、ヤンキーみたいな口調で話しかけてくる男。30歳くらいだろうか。いい歳こいて、何やってんだか。

プロッサム「ボシキね、私が殺るわ。ロイさん、あなたはマスターを狙つて。」

ロイ「ああ、貴方なら楽勝ですよ。では、任せましたよ。」

そう言い残し、走つて去つていった。

プロッサム「行つたわね。これで私もちゃんと力が出せるわ。覚悟しなさい？」

sideイグナム、サフィア

い「おい、今なんて言つた？」

さ「だから、全員死にます。」

こんな性格だつたのか？あの魔術を使ってから何かおかしい。ビリ
い「ことだ？」

さ「こんな弱いやつと戦うために私は人間のところに来たんじゃな
い。もっと強いやつと……もっと……足りないわ。」

・・・・・・・・・今、何ていつたんだ？

17話 亂戦（1）

今、何ていったんだ？

人間？弱い？もっと強いやつ？

・・・・！

もしかして、人間・・・ではない？

い「お前つ！何者だ！」

さ「あははは、弱いわ。ハーピィには強いマスターがいるから入ったものの、マスター以外超平和主義者でさー、」

い「だから、お前は何なんだ。」

さ「ああ、あたし？あたしはサフイリア・シム・グラフィ。」

い「それが本当の名前か、それと、正体を見せろ。」

さ「ええ？あたしと戦ってくれる？」

い「何を言つんだ。今は仲間だ。そんなことはできない。」

さ「へえ、じゃあ・・・

サフイアことサフイリアが腰から剣を取り出す。そして超人的なスピードで近寄ってきた。

い「何！？」

sideガイ、ユウト

ユウト「いや、でもいけんじゃないっすか？」

ガイ「まあ、そうだよな。たかが鬼だもんな。」

2人は落ち着いているが、頭はフル回転している。さすがに30体近くを相手にするのは厳しいようだ。

サウスター「あの～、いいですか？」

ガイ「あ～、すいやせん。どうぞ？」

サウスター「はい、じゃあ続き。行けええ～！鬼軍団～！そこの2人を蹴散らすんだ～」

鬼たちは一斉に動き出した。ユウトとガイは構える。

赤鬼がユウトに向かつて走り、棍棒を振り上げる。ユウトは右に飛んで避けた。さらに、黄鬼が放った矢が飛んでくる。ユウトひ舌打ちし、極太の矢を転げてかわす。そして起き上がるとともに赤鬼に接近し、

「シャドウウェポン・ソード！」

コウトの背後に灰色の剣が4本出現する。そして、赤鬼の左足に飛んでいく。

そのすべてが刺さり、血が噴き出す。鬼は悲鳴をあげて倒れた。続いて、コウトは黄鬼に向かつて

「シャドウウェポン・アーム！」

影が拳の周りを包む。左手で右手首をつかみ、右手をパーにする。そして右手を黄鬼の腹に向ける。黄鬼がコウトを蹴ろうとした瞬間、コウトは左手に力をこめる。すると、右の手のひらから黒い炎の弾を発射した。ダン、ダン、ダンと命中し、鬼の腹に穴を開けた。血が噴き出す中、機械がチラツと見えた。

「ほんとに改造されてんだな。」

ガイは、青鬼2体を相手にしていた。

ガイ「この靈劍ウォールニアはそんな軽い剣じゃ、刃こぼれひとつしないぜ！」

水色の光る剣が、青鬼の剣を受け止め、弾く。ガイは、かかつてこいよ。と挑発している。青鬼は2匹同時に上と下に斬撃を繰り出した。ガイはしゃがみながら飛び、下の刃に乗った。そして、そのまま剣とともに上空に上つた。一番上にたつしたところで青鬼の顔面に飛び移る。もう一方の青鬼がガイに向かつて剣を振り下ろす。ガイは笑つてもう一方の青鬼に飛び移る。だが、剣はとめられるはずもなく、青鬼の顔面を真つ一つにする。脳のところは完全に機械だつた。ひでえことしやがるぜ。ガイは剣を青鬼の頭に突き刺した。返り血を浴びたガイは、きつたねえ、と汗をぬぐうように腕で額を拭く。

「おい、チビ！なんでこんなことしたんだ！鬼たちにも人生・・・いや鬼生つつうものがあるだろ！」

サウスタは聞こえているのか聞こえていないのかまったく動じない。赤鬼と青鬼が同時に襲つてきた。剣を一振りすると赤鬼の拳が切断され、手首から先がなくなつた。右手で左手首を押さえて蹲つている。青鬼はその隙に背後へ回り、剣で突きを思い切り繰り出す。ガイはそれを紙一重でかわし、懷へ潜り込んだ。剣を突きの構えに変えて、上を見る。青鬼のデカイ顔がガイを見下している。

「ブルー・アクエリアス」

剣が大量の水を纏い、その水が細く鋭くなるように変形し、ランスのようになつた。

「スピア・アクアウェイブ！」

剣は青鬼の顔面を正確に突いた。

ユウトは、赤鬼と黄鬼×2を相手にしている。

「シャドウエポン、ソード！」

今度は前に6本の剣が出現し、サークル状になつた。そして、黄鬼から飛んでくる矢を防ぎきつたところで、左手で右手首をつかみ、右腕を前に出す。すると、剣は1本ずつ鬼に向けて飛んでいった。

「はあ、何か、改造鬼つてやる気が・・・」

つまらなそうに1体ずつ片付けていくガイとユウトであったが、ユ

ウトは黄鬼に飛び乗ったところで、黄鬼の頭から何か聞こえた。

ハハハハハハハハハハ

ハーハー

黄鬼の顔が膨らみ、爆発した。

「ハハハ…シャドウウェポン・ダークバリア…！」

ウトの前に黒いバリアが発生し、爆風を防いだ。なんだこいつ等。自爆までするつて言うのか。それとも、サウスタがやつてるだけか。黒鬼はどうか悲しい顔をしている。

すると、黒鬼が何かふつされたように立ち上がり、拳を振り上げた。そして振り落とした。

サウスタに向かって

s a d eイグナム、サフィリア

「あはは、いいわ、久しぶりだわ。この感覚…」

「お前、その姿…魔人だつたのか…！」

「ええ、そうよ。正確には魔女ね。さあ、ちゃんと殺す氣で来てよ

？じゃないと・・・死んじゃうよ？」

サフィアは不適に嗤い、剣を捨てる。

「せつかくだから、あなたとは魔術で勝負したいわ。」

「いいのか、私はフェンリルだぞ？」

「だから殺す氣で来てつていいてるでしょ？」

サフィアは息を吸い込み、落ち着いた表情に戻った。そして

「ヘルブレス！」

口から黒いブレスが発射される。イグナムは

「チツ、ブラックミスト」

暗い霧が立ち込め、サフィアは一瞬戸惑う。なんせ彼女には、イグナムに囲まれているように見えるからだ。これは、幻術。わたしに、こんなもの・・・？解除できないだと？

「どうだ？解除できないだろう？最初からおかしいと思っていたんだ。なぜ俺につく必要があった、なぜ人間にはありえないような魔法が使えた？それは、お前が人間じゃないからだ。だから私はこの魔術を対人用から対魔用に調整したんだ。どうだ？わかったか？」

「くうう、あたしだつて魔女よ、甘く見ないでよ。スパイラル・ダス・エフェクトオ！――！」

暗い霧が一瞬にして晴れた。

「夢幻地獄！」

イグナムの前に、3対の死神・・・

sideロイ

プロッサムさん、頼みましたよ。

それと、イグナムは始まつたかな。プロッサムさんが、彼女は魔人だということを教えてくれなかつたら今頃イグナムは・・・ロイは携帯電話を取り出し、メアリーにかける。

め「あつ、ロイからだわ。どうしたの？」

ろ「ああ、敵と遭遇しなかつたか？」

め「ええ、今は。何で？」

ろ「お彼らの近くに異様な魔力を感じる。」

め「ええ、気づいてるわ。だけど大丈夫よ。」

ろ「そうか、それならよかつた。気をつけろよ。」

でけえ魔力だなあ。メアリー、マサヤ、大丈夫か？ま、マスターのほうが危険だろうが。

つか、早く誰かと殺りあいてえんだけど・・・

sideガイ、ユウト

2人は目を疑つた。なんせ、鬼のボスであろう黒鬼が、サウスタに向かつて拳を降ろしたからだ。その拳はサウスタよりも大きい。サウスタの身長なんて、黒鬼の膝にも及ばない。けれど他の鬼は動じもせず、ガイとユウトを襲うが、2人はかわしながら、黒鬼の様子を観察していた。拳を振り下ろす黒鬼は泣いていた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

黒鬼の拳がサウスタに近づいていく。そして、ブショウウウと音を立ててサウスタの地が飛び散った。拳を上げると、サウスタは木つ端微塵になっていた。

「サウスター、やつてくれましたね。黒鬼さん。」

ガイ、コウトー！！！」

黒鬼は困惑している。確かにそうだろう。今潰したばずの人間の声が、重なつて聞こえてくるのだから。そして、鬼軍団の奥には、サウスタガ6人。

サウスタ「ふふふ、やはりキミにはその程度の改造しきれませんで
したね。知性と感情をコントロールできるとは。鬼もなかなか興味
深いものだ。」

黒鬼はフウーフウーと息を荒げ、サウスタたちを睨みつける。

サウスタ軍団が何やら唱え、1人のサウスタがユウトに向かつて飛び出した。ユウトは不意をつかれ、急接近を許してしまった。そしてサウスタの脛が、腹に直撃する。

ユウトはそのまま10メートル程吹っ飛んだ。そこに、黄鬼の放った極太の矢が3本飛んでくる。矢は阻止されることなくユウトの元までたどり着いた。

ガイ「ユウト……！」

ドカアアアアン

ユウトはシャドウウェポン・バリアを発動し、なんとかその攻撃をしのいだ。だが、矢先はバリアを貫き、ユウトの眼前で静止していった。

ユウト「ヒィー、あぶねえ。そろそろ本気で行くぜ。シャドウウェポン・アームズ・ゲート……！」

ユウトの背後に3メートルくらいの門が現れた。門が開くと、大量の矢が飛び出した。

鬼軍団は耐えられるはずもなく、大多数が全身に魔力の矢を浴び、死滅した。

サウスタ軍団は、ひよいひよいと右へ左へ飛んで避けまくっている。門が閉じたとき、残っていたのはユウト、ガイ、サウスタ6人、黒鬼、鬼8体だ。

サウスタ「ほれほれ、剣士さんやい。よそ見しないでね。」

ガイはサウスタに胸ぐらをつかまれ、サウスタ4人のほうへ思い切

り投げ飛ばされた。

ユウト「ガイさん……」

ユウトは鬼に阻まれてガイを助けることができない。

サウスタ「「「来ましたね。『テストラクション・サークル』」」
4人のサウスタの中央には魔方陣。ガイはそこに落下した。その途端、魔方陣が光を放つた。

サウスタ「「「魔方陣よ、目標はこの男です。」」」

魔方陣が呼応するように、点滅すると、光の柱が魔方陣から出現し、ガイを包み込んだ。

ガイ「うあああああああああああああ！」

ユウトは鬼を潜り抜けようとしたが、やはり抜けない。ガイさん・・・

すると、黒鬼が動いた。4人のサウスタに向かつて走り出した。サウスタは3人は気づいたが、背後から走つてこられてきているサウスタは気づかない。そして黒鬼の足で、サウスタを踏み潰した。魔方陣が不安定な形になり、光の柱は消滅した。ガイはところどころに切り傷ができていた。サウスタは一旦合流した。

ガイ「お前・・・今、もしかして・・・」

黒鬼はガイを睨みつける。お前も同じだと言つてるようだ。

ガイ「すまねえな。お前の子分をあんなにしちまつて、だけど今は共闘しかない。あの鬼たちも、もう・・・」

黒鬼は、サウスタ達を見て、ガイに視線を戻した。合意してくれたようだ。

ユウトは鬼たちと相手をしていて、あることに気がついた。そしてそれは極めて単純であつた。

耳に無線機がついている。

ユウト「シャドウウェポン・ランス」

ユウトは若干呆れつつも耳の無線機を破壊する。すると鬼は我に返る。そして周りのおびただしい数の鬼の死体を見て、呆然としている。

残りの4体の無線機も壊す。赤、赤、青、黄、黄は正気に戻る。

ユウトは内容を簡潔に話し、他の鬼を救えなくてすまないと謝る。鬼は全員泣いていた。

ユウト「倒すべきは、あそこのチビ科学者だ！」

鬼は立ち上がった。みんな涙を拭き、ユウトの後に続く。

黒鬼は、2人のサウスタを相手にしていた。さつきまでは不意打ちをしたから攻撃がヒットしたが、今回は掠りもしない。

サウスタ「「メディカル・ホーミングブلاست！」」

サウスタからカプセルが2発飛んできた。黒鬼は避けるが、追尾してくる。黒鬼はカプセルを掴んだ。そして、サウスタに投げつける。サウスタは手をかざした。すると、ミサイルはまた照準を合わせなおした。黒鬼は体制を崩されたままだ。黒鬼は死を覚悟した。

ドカアアアアアアアアアアアアン！

黒鬼は目を開けた。すると赤鬼と青鬼がミサイルを殴り飛ばしていった。黒鬼は驚きを隠せない。

赤鬼と青鬼は涙を浮かべながら黒鬼のほうに振り向き、ニッとも笑つた。

黒鬼も泣きながら笑いかえした。

ガイも2体のサウスタと戦っていた。こちらも、ホーミングブلاستによつて苦戦していた。

ガイ「チイ、あのチビにも誘導できないし、さつきの爆発を見れば、威力はハンパじゃねえ。ウォーレルニア！出て来い！アクエリアス！」

剣から、水色の男が現れた。かなりごつく、テルマエ マエの表紙を想像して欲しい。

男は右手を前に出し、そのまま右に振り切つた。すると、大量の水が噴き出し、ミサイルを包み込んだ。すると、ミサイルのケツから噴き出していた炎が消え、そのまま落下した。

男は時間切れ、というようにガイを見つめたあと、光になつて剣に

戻った。

ありがとよ、アクエリアス。

ガイは剣を握りなおし、サウスタに斬りかかる、だが、サウスター2人はそれをかわし続ける。

そして、1人のサウスターが剣をかわして、ガイの腹に拳を叩き込んだ。ガイが怯んだところでもう1人のサウスターがガイの頭にかかとを落とす。ガイの頭は、そのまま床にめりこんだ。

2人のサウスターは、笑ながらジャンプし、腕を広げる。

「「ヴァイラスストーム」」

2人のサウスターが腕を上げる。赤色の竜巻が発生し、ガイを囲む。嵐がやんだあと、そこにガイは居らず、穴が開いていた。

サウスター「床を壊したか。」

サウスターの背後に剣が光る。そしてサウスターを真つ一つにした。残ったサウスターは驚き、あわてて飛び退く。

ガイ「下に逃げたと思ったか？残念、上に逃げました」

サウスター「なるほど、下に逃げたと思わせて上に跳んだか。なかなか頭を使つたじやないか。馬鹿の分際で。」

ガイ「お前もここまでだな・・・！」

ガイは背中に焼きつくような衝撃を覚えた。後ろには笑ったサウスターが立っていた。

サウスター「私は5人、いや4人もいるのですよ？2対1なんて思わないでくださいね。」

ガイはその場に倒れた。

そこにユウトが駆けつけ、

ユウト「待っててください。こいつらは俺が殺りますから。」

そう言つと、ユウトはサウスタに接近し、1体を蹴り飛ばした。

「シャドウ・ハンマー！..！」

サウスタの頭上に黒いハンマーが現れ、ユウトはそのハンマーを遠隔操作で落とした。血が噴き出し、床が抜ける。

黒鬼は、鬼たちと協力してサウスタを倒している。

6対2、鬼のほうが圧倒的に有利だ。サウスタは防戦1方だった。だが、鬼軍団の攻撃に耐えられなくなり、1体のサウスタが2本の矢に同時に射抜かれた。

サウスタは残り2対。合流し、お互い手を合わせる。すると、むくむくと膨れ上がり、1匹の巨大な蜘蛛になった。足は6本、既に服はない。紫と黒の縞模様の蜘蛛は、鬼たちと同じ大きさだった。

蜘蛛が口を動かし、ひゅんと針を飛ばす。青鬼に命中した。すると、青鬼は悶え苦しみ、そのまま動かなくなつた。

場が凍つた。

ガイはふらふらと起き上がり、巨大な蜘蛛を見上げる。ウォーレルニアをしまい、例の伸びる剣を取り出した。

ユウトも、自分の周りに魔方陣を4つ展開させた。

蜘蛛の4つある目が、ガイとユウトを捉えた。そして、毒針を飛ばしていく。

ユウト「ガイさん、ここ俺が！シャドウウェポン・メタルシールド！」

バリアより範囲は狭いが、硬そうな壁が現れる。

当然、針ごときが貫通するはずもなく、キン、とはじかれる。

赤鬼が蜘蛛に殴りかかる。狙いは足、だが、尻から体液が飛び出し、赤鬼にかかった。赤鬼は見る見るうちに溶け、残ったのはわずかな肉体と骨だけである。

黄鬼も矢を放つが、蜘蛛はそれをかわす。全く相手にされていない。

黒鬼は、何かを決断したかのように立ち上がった。

黒鬼は立ち上がった。

そこには黒鬼ではなく、鬼族のリーダーとしてのプライドの塊であった。

ガイ - 黒鬼 -

黒鬼は怒りによつて顔が真つ赤になり、水蒸氣が出ている。2本の角は帶電し、パチパチと音を立ててゐる。

黒鬼が呟えた。鼓膜が勢いで脳の中に沈んでしまいそうだ。黒鬼は自我を失っている。白目になり、もはや何を見ているのか分からない。突つ込む気なら、フラグを立てるだけだ。他の鬼が宥めるが、黒鬼は腕で払いのける。やはり何も見えていない。

案の定、黒鬼は蜘蛛に突っ込んだ。

ト。」
サウスターおうと
でかいだけじゃ勝てませんよ。はい、プレゼン

蜘蛛が針を飛ばした。黒鬼は頭を右に動かしてそれをいとも容易く避ける。

サウスタ「なんと。冷静を失つてもここまで戦えますか。本当に興

味深い。
むしろこっちの方が強いんじゃないですか?」

黒鬼は蜘蛛の目をひとつ掘んで、握りつぶし、顔面に右の正拳を叩き込む。

サウスター「ギヤアアアアア！」

黒鬼は休むことなく殴り続ける。4つあつた目も、すでに全滅だ。口からは針を発射しているが、黒鬼は蜘蛛の口を動かして猛毒の針を免れる。

がいやがわに、鬼たちは見守るしかなかつた。いや、見てるしかなかつた。

口がありえない形をしているので、うまく発音できない。

黒虫にからに凶る
やうやく彦町がなぐる所り、なしにこしらへ

黒鬼には全く聞こえていないようだ。ガイやコウトにも理解不能だ
が。

まあ、仲間を25匹近く殺されて、冷静を保つてられるやつなんているはずがない。黒鬼も同じだ。仲間を大量に改造され、自分もさつきまで全く覚えていないのだから。黒鬼はサウスタをこれでもか、というくらい殴つた末に、正気に戻つたようだ。

前には顔面がぐちゃぐちゃになつた蜘蛛がいる。

「 「 「 ! ! ! 」 」

サウスターが正しく発音した！ ユウトは蜘蛛のほうを見ると、蜘蛛の顔面は完全ではないが再生していた。

ユウト「そんな、馬鹿な・・・めんどくせーーー！」

サウスター「面倒くさいとは、いい褒め言葉ですね。私のような雑魚はこうやって粘るのが精一杯なんですよ。しかし、あの毒針はですね、テイルジエニーの猛毒の体液を濃縮し、針の中に注入した最凶の毒針です。そして、この体液もそうです。この酸はタンパク質を1瞬で溶かします。故に、貴方たちはこれに触れれば、ジエンドということですね。」

ガイ「そんなことより、何で何人もいたんだよ。」

サウスター「何だ、そんなことですか。既に、私の本体は死んでいます。しかし、私はその本体です。矛盾してますね。ですが真実です。まず、私の体をたくさん作ります。つくるといつても、1体作るのには最低半年かかります。そして1体当たりに使われる人間の死体は5つ。また魔物の細胞なども必要です。」

ユウト「つまり、人が5人、犠牲に・・・なったのか・・・？」

サウスター「ええ、そのとおりです。私としてもとても心が痛みましたよ。同じギルドのメンバーをこんな風にしてしまって。」

心にもないことを。でも自分が不細工なのは自覚してるんだな。おそらく犠牲になつたのはイケメンだろう。

サウスタ「そしてできたのが6つの体です。あとは複雑な作業になります。まず、神経を作り直すために、本体があらゆる動きをして、そのデータを体に書き込まなければなりません。それには3年かかりましたよ。ですがやはり限られた動きです。限界がありますが、この私の今の体、そうですね・・・スパイダーモードでいいです。モードと言つても戻れませんが。この体は、1つの進化した生命体と同じです。すなわち、どんな動きも可能！あの縛られた体とは違うのです。」

スパイダーモード・・・もつといいのはないのかとガイは考える。

サウスタ「そのあとは知能です。私をサウスタ・アリッジと同じ記憶、思考、目的を持たなければなりません。あの科学者、いや、私は本当に優秀です。なんせ私は彼だから。」

ガイ「ごめん。そろそろ本気で分からなくなってきた。」

サウスタ「黙りなさい、サウスタ・アリッジと同じ記憶、思考、目的を持たせるには脳をそつくりそのままコピーするしかありません。分かりますね？」

コウト「イケメンの脳か？」

サウスタ「イケメンは余分ですが、正解です。2人分の脳を必要とします。よつて、私1人のための犠牲は7人、そして試作品が約70人。なんとも言えぬ優越感つてやつですね。」

狂っている。普通はそこで罪悪感を感じるのではないか？

サウスター「そしてそのイケメンの脳・・・いや、普通の脳をフォーマットします。そして、自分のデータを書き込んだデータチップを脳に埋め込み、起動すれば私の脳が完成ですよ。あとはその脳と体の相性。あわなければ処分、合えば私たちのようになる。これで一応終わりですが、質問は？」

ガイは寝ている。コウトは難しそうな顔をしている。

コウト「そんなに多くの犠牲者が出る研究を、ここはマスターは許可したのか？」

サウスター「ええ、しましたよ。とても簡単に。お前は優秀な科学者だ。兵ないうらでもいる。使ってくれ、と。」

コウト「ばかげてる・・・お前、ちょっと喋りすぎたぜ、また黒鬼に口瀆されんぞ？」

サウスター「あの痛みも途中からは快感でしたねえ。」

コウト「もういいや。ガイさん、行きますよー。」

ガイ「ん？終わった？ああ、終わったね。行きます行きます。」

コウト「真面目にやりますよ。」

2人はサウスターに近づく。ガイは剣を構え、剣を伸ばす。

ガイ「グッ、重いな。質量も変化すんのかよ。」

伸びた剣は蜘蛛の6本の足のうち、1本を貫いた、そしてその足は

黒焦げになつて灰になつた。そしてそこからは新しい足が一コキつと生えてきた。

ガイ「剣もじんねえし……」

ガイはこの剣の性能を把握してなかつたらしい。

ユウト「シャドウウーポン・デビルホーン！」

腕が変形し、一角竜の角のようになり、黒く染まる。その腕を口に突き刺す。ブシュウと体液が噴き出し、また再生する。

ユウト「キリがないな。1発でかいのを撃たないと。」

サウスタ「トコトコ」

サウスタの爪がユウトの腕を切り裂いた。

ユウト「じつて……」の野郎……シャドウ・ヒーリング！

影が腕にまとわりつき、出血部を覆い、固まる、ざつやら止血だけの応急処置のようだ。

ユウトはホーンを解除し、後ろに下がる。

ユウト「シャドウ・ブレス！」

指をおくサインにし、口の前に置く。息を思い切り吸い込み、吐き出す。ブウオオ！と黒いブレスが蜘蛛を襲う。ブレスが止み、蜘蛛が姿を現す。蜘蛛は腹から上がなくなり、体液をダラダラと流していた。

ユウト「くそ、足りなかつた……！」

ガイ「くそ、これしかない。ボルティージー！」

魔法陣が現れ、猿が登場。

猿「お呼びですかい？グリ……あれ？」

ガイ「俺の名前はガイだ。お前の力が必要だ。貸して欲しい。なんか大技をあの蜘蛛に！」

猿「お、おお……分かつた。アルティメットボルト・LVMAX
！！！」

猿が両腕を前に出し、極太レーザーが発射される。それは寸分の狂いなく蜘蛛に向かっていった。

レーザーが貫通し、蜘蛛の体は4分の1程になつた。

ガイ「くそっ！ウォーレルニア！」

剣を捨て、水剣を手に走り出す。

ガイ「アクエリアス・ショートオ！」

ガイは上空に飛び、剣を掲げ、魔力をためる。それを一気に振り下ろし、水の斬撃を繰り出す。

ユウト「シャドウウェポン・テラ・ボム！」

コウトは両手を掲げ、上に広げる。すると薄暗い弾が出現し、むくむくと膨れ上がる。コウトはそれをよいしょ、と投げる。皆はその様子を眺めている。

コウト「既に逃げろー」の周辺の部屋は木つ端微塵だ

「

三つのが遅い

「ウチ「詫早く逃げて~」

ガイ「チツ、」

コウトの放つた巨大な薄暗い球体は蜘蛛へと落ちていく。黒鬼も仲間を呼んで逃げようとしている。

サウスタは体がほとんどなく、ぐつたりしている。

「ウト「下だ!、下に逃げろ!」

ユウトは影攻撃で床に穴を開け、下の階へ降りる。

ヴェ「ああ、なんとなく分かつてゐぜ。任せな。」

ヴェステアーロンが現れ、ガイを乗せて降下する。ガイは先ほど開けた穴から逃走を図ったようだ。鬼たちは、ズシン、ズシンと音を立てながら着地する。ここ周辺の部屋は実験スペースなのか、とても広い。ここは、さつきサウスタと戦ったところよりも広い。

上の階で爆発が起きた。上の床は全て壊れ、下に降つてくる。

ユウト「馬鹿な、こんだけしか壊れないだと……？」

ユウトはこの周辺の部屋は吹っ飛ぶと言つたが、実際は1部屋しか壊れていなかつた。そして、その部屋も壁にはあまり壊れた痕がない。

砂埃が立ち、天井を見上げるとさつきの部屋の分天井が高くなつて。
・・・・・・・・・・

ユウトとガイは驚愕した。鬼たちもだ。天井には、蜘蛛の巣を作り、その中央で固まる蜘蛛が1匹。そう、サウスタだ。

サウスタ「はははは……こんなんで私を仕留めたと思いましたか！？甘いですね！」

そう言い、さらに上の階の壁にも糸を張り巡らす。なんだか黄ばんだ糸だが、サウスタの体重を支えるのだから、とても丈夫に違いない。つかまつてはいけない。

サウスタ「危なかつたですねえ。あんな攻撃をもろに喰らつたら即死ですよ。変身してなかつたら終わつてましたね。」

コウトは携帯電話でロイに電話する。

コウト「ロイさん、じつは結構時間がかかりますけど、どうですか？」

ロイ「問題ない。俺もマスターを探している途中だからな。さつきの爆発、テラボムだな？ それでも倒せないのか？」

コウト「ええ、まあ必ず始末します。では」

ロイ「ああ、死ぬなよ。」

コウトは携帯をしまう。

サウスタ「終わりましたか。では再開と行きましょうか。」

サウスタは毒針をガイとコウトに向けて乱射するが、コウトのシールドによつて阻まれる。ガイは剣を拾いに行こうとダッシュする。サウスタが阻止しようと酸をぶちまけた。だが、それもヴェステアーロンの攻撃によつて阻まれる。ガイは剣を拾い、サウスタを見据える。

サウスタは天井から飛び降りた。着地時に足が全部折れたが、すぐに再生する。そんな中、コウトは鬼を守るために、鬼のところにいた。サウスタは、慌てる様子もなく、ただ相手の動きを待つっていた。

黄鬼が矢を放つた。回転しながら蜘蛛に向かっていく。命中したが、矢がズブズブと蜘蛛の中に沈んでいく。サウスタが跳躍し、その黄鬼の後ろに着地する。コウトはしまった、と顔をこわばらせる。何

が発動させようと思つたが、遅かつた。すでに黄鬼の上半身がなかつた。そのまま赤鬼が顔面に右足で思い切り蹴りうつとするが、ひよいとかわされ、爪でその足を切断され、そのまま右腕をも切断する。サウスタは楽しそうに笑う。赤鬼も、ほんとは即死させることができただろうが、しなかつた。殺生を楽しんでいるのだ。

「コウト」「シャドウウェポン・ソード！」

コウトの背中に剣が現れる。剣を発射し、目を潰す。サウスタが楽しそうに絶叫し、毒針を撒き散らす。ガイはヴェステアーロンの魔術によつて免れた。そして、鬼たちは、コウトの魔術により、危険を回避した。

サウスタは一時的に目が見えないだけで、すぐに回復する。もう二つの目が再生している。

猿「ボルトミサイル！」

少し忘れ氣味だったが、忘れんなどばかりにミサイルを発射する。サウスタは正確に爪で打ち落とす。しかし、爆風で周りが見えない。

ガイ「今だ！月下砲・王雷！」

ガイの剣がギュイイイイインと伸びる。それはサウスタの顔面を貫通する。そして、その周囲は黒く焦げ、無くなっている、穴が開いているのだ。

「コウト」「シャドウ・ハンマー・シャドウ・ブレス！」

コウトは2つの魔方陣を展開し、人よりも大きいハンマーを召喚し、

蜘蛛の頭部を潰す。大きな地響きがなる。それでも休まず。口の前に手を当てて、プレスを発射する。

ハンマーによる煙と、プレスによって、サウスタの周りは何も見えなくなつた。

煙が薄くなつていいく・・・

何もいな? 体液が飛び散つている。跡形もなく消したのだらう。

コウト「ガイさん、帰りますよ~」

ガイ「何言つてんだ!~!~!~!伏せろ」

コウト「えつ、何?」

コウトは咄嗟に伏せる。コウトは一瞬間に何か通り過ぎたよつた感覚を覚えた。

そして、コウトの隣に何か落ちてきた。大きい、青ぐらいあるんじやないか?

ユウト「く、黒鬼・・・・？」

そう、床には黒鬼の頭が転がっていた。

21話 蜘蛛の生き様（2）

「ロゴン

コウトの横には黒鬼の頭。そして数秒後、ズシィイイン、と黒鬼の体も遅れて崩れ落ちる。

コウト「え・・・何で・・・」

サウスタ「んふふ、黒鬼さん、『苦勞様でした』。」

コウトの背後からサウスタの声が聞こえる。あの攻撃を回避したらしい。

本当に生命力の強い蜘蛛様だ。蜘蛛はケラケラと笑うように跳ねている。

コウトはそんなサウスタを血走った目で睨んでいる。

そうだ、俺がいけなかつたんだ。俺があそこで気を抜いていなければ黒鬼は、他の鬼の助かつたかもしれない。コウトは鬼たちのほうへ目を向け、鬼たちの亡骸を見つめる。本当にすまない。俺が調子乗つて、肝心なところでダメだったから。

さつき同じ志を持ったばかりの鬼たちなのに、そこまでの感情をもつてしまふほど、いい種族だった。

ユウト「蜘蛛がああ、殺す！シャドウ・フレアソード！」

ユウトの背後に薄い赤色の炎を帯びた剣が6本現れた。

サウスタ「火属性だと…さつきの薄暗いのだけじゃないのか！」

ユウト「ああ、基本は影だ。それを少量の属性の魔力と練り合わせることで、属性を帯びた影となる！だが、魔力を混ぜるに当たって影と影は混ざつても威力が変化するわけではないけどな。」

サウスタは後ずさりする。

ユウトは剣を1本ずつ発射した。1発、2発、と蜘蛛が巨体に似合わない素早い動きでかわし続けるが、5発目にして、後ろ足に剣が命中し、6発目はその足の太腿に突き刺さつた。サウスタは地面に落下し、足をバタつかせる。剣は沈むことなく炎を発し続け、蜘蛛の足を蝕んでいく。

サウスタは糸を剣に向けて発射する。糸は剣の柄に絡みつき、剣を引っこ抜く。

ユウト「シャドウ・ガイアダンス！四獸降臨」

サウスタ「今度は土か！」

ユウトの周辺の床が盛り上がる。そして、4本の柱になる。それぞれの柱の頭は龍、鳥、虎、亀になっている。それぞれ床の色の白色だが、迫力は十分だ。

ガイ「四獸降臨が出たか、いつみてもすげえな。」

青龍、白虎、朱雀、玄武は蜘蛛に襲い掛かる。顔を突っ込み、蜘蛛の体を貫き、縫うように暴れまわる。

「ウソの床が素材なら、おまえの酸や毒針は効かないよな。せいいもがいて苦しんで、己の犯した罪を悔いるんだな。」

青龍が口を喰いちぎり、朱雀が背中をついばむ。玄武は足を引っ張り、白虎は腹を食べている。サウスタは抵抗を試みるが柱が絡まって動けない。

四獸が蜘蛛を食している最中に、蜘蛛は再生する。だが、それを四獸たちは食い続ける。

容赦がない。

ちが受けた痛みや悲しみはこんなものじやない。

サウスター ああああああああああああああああ！」

サウスタ歪んだ口から毒針を大量発射した。その量は今までの比じゃない。1秒間に50発は発射しているだろう。

そして、

ガイ「くあつ！」

גַּתְתָּאָרָה

ヴェステアーロン・ボルティイジ「ユウト！・ダンナア！」

2人が被弾した。みるみる力が抜けていき、膝から崩れ落ち、苦しそうに胸を抱える。涎がダラダラとたれ、震えが止まらなくなる。だが、四獸は止まらない。

サウスター「どうだ……これ……で……貴方たちだつて……死にます……」

ガイ「クソ……冗談は顔だけにしろ……」

地味に貶している。

解毒剤、解毒剤はどこだ?とガイはあたりを見渡す。オレは1針だけだが、コウトは5本は当たっていた。俺が見つけなきや……。

サウスター「無駄です……解毒は……できません。」

くつそ、ここまでか。

ウォーレニア……今まで、ありがとな。少々荒い使い方を何度もしたけど、それももうできない。アクエリアス、結局何も、話さなかつたな。話してみたかつたんだぜ?お前のそのゴシそうな声を聞いてみたかつた。畜生、俺があんな蜘蛛野郎に負けるなんて。

口の中に地の味がする。内蔵もやるのか……こんなところで……

ガイ「うう……ううああああ……」

手に持つている剣が光る。

ガイ「ううおおおおおおおおおああああ!」

剣が水色から濃い青色に変わる。

そして、体の氣だるさは全て吹き飛んだ。血の味はするが。

? 「ついにここまで来たな。ガイ・ランドルフ。私はアクエリアスだ、靈劍ウォーレルニアに住む精靈だ。」

アクエリアス「この剣はお前が強い意志を確認しなければ本来の力発揮できない。そして、今、それが確認された。この剣は靈劍ウォーレルニアではない。この剣の本来の名前は、靈劍ルシフェル」

ガイ「ルシフェル・・・そうだ! ユウトは! 治せるのか! ?」

アクエリアス「ああ、見ておけ。」

アクエリアスがユウトの元へ駆けつける。そして、片手に緑色、もう一方の手には青色のオーラを纏い、ユウトに強引に押し付ける。ユウトは一瞬、ビクンと跳ね上がり、動かなくなつた。

アクエリアス「これで大丈夫だ、しかしこの毒は強力だ。内部損傷はあるが、外部損傷まである。彼は起きたとしても、すぐには動けんだろう。」

ガイ「ボルティジ、ヴェステアーロン! ユウトの近くにいろ! 絶対に守れ! !」

四獸は崩れかかってきているが、まだ動きを封じてくれている。今しかこいつに止めをさせない。

ガイ「アクエリ亞ス！ 1発で決める！」

アクエリ亞ス「ああ、確かにこいつは厄介だ。今しかないだろうな。

」

ガイは自信に満ちた表情で蜘蛛を見つめる。

ガイ「サウスター！ お前はやりすぎたーあの世で泣いたってもう遅い！ お前は死んでも永久に犯罪者のままだー！」

22話 蜘蛛の生き様（3）

ガイはルシフェルを握り締める。

靈剣ルシフェルは、ガイの所持していた靈剣ウォーレルニアが一種の封印を解かれて元の形に戻つたものである。

片刃で薄く鋸い
刀身は深い青色で
柄は両手で持てて拳々
らい余るほどだ。

であります。

蜘蛛にはまだ四獸が纏わりついている。

力には魔力を劍にこめる

ガイ「ブルー・オン・ブルー！」

剣をかざすと、水が集まり、細身の刀身が分厚い大剣に変わる。水はだんだんと固まつていき、氷とは違うが宝石のように硬そうな物質に変わる。透明な宝石の中に薄い刀身が輝く。美しきが如きは似合わぬそうだ。

大量の水を凝縮させてるので見た目よりもずっと重い。

ガイが大剣を振り上げる。

ガイ「ファイナルアクエリアス！！！」

ガイはその大剣を蜘蛛の顔面にぶち込もうとする。

そんな中、サウスタは

私は死んでしまうのですね。

幼いころから親には暴力を受けていた。そして、散々私を痛めつけたあと、蒸発してしまった。

そして私は、その憎き両親のあとを追うことはできず、公園で空を見つめていた。そして、ある一家に拾われた。そこの人たちは、私に優しかった。昔受けていた虐待など、忘れてしまうほど。

そして私は魔法学校に入学した。当然のように私は誰からも相手にされなかつた。それは、この姿と両親がいないせいで。筆箱や教科書を隠されるのは日常茶飯事だつた。しかも、次の授業の教科に使う教科書を隠すのだから質が悪い。

椅子の上に画鋲が2、3個あつて、それを踏んづけて泣いた日もあつた。だが、先生は何も言わなかつた。机の上には菊の花が置いてあつたり、死ね！ チビ！ 粿野郎！ などの暴言が油性ペンで大きく書かれていたことがあつた。

もちろん家では何も言わなかつた。自分を救つてくれた恩人に心配をかけたくないのは当然だろう。そして、ここが唯一の心のより所だつた。

帰る場所があるから、トイレで用を足していたときに水を被せられたつて、テストでしてもいいカンニングのせいで先生に怒られたつて我慢できた。

私は、これは自分のためだと言い聞かせて魔法や学問に打ち込んだ。

しかし、ある日学校から帰つてきたときのことだつた。

私は部屋の中から話し声が聞こえたので、耳を立てて聞いてみた。義父の仕事のことだろうか、義姉の進路のことか、それとも自分の将来か。

どれにも当てはまらなかつた。

母「サウスタ、今更だけどそろそろ邪魔になつてきたわね。拾つたばかりのじゅは小さくて可愛かつたけど、今じゃあんなになつて・・・」

父「俺らの血が通っていないからな、適當な理由をつけて追い出すか?」

母「うーん、あの子には悪いけど、施設に入つてもらおうか。」

私は耳を疑つた。あんなに可愛がつてくれたのに、それはうわべだけだったというのか。

これは一応自分の将来に入るのか?そんなことはどうでもいい。

サウスタはドアを蹴破つて中に入った。父母は驚きを隠せない。サウスタの手には包丁が握られていた。

サウスタは無我夢中で父母を切りつけた。もう死んでいるのに更に傷つける。もはやどっちが母でどっちが父か全く判別できないほどになつた。そして、ようやく我に返る。

何だ、この淫らわしい肉体は、私がやったのか？ そうか、たか私は悪くない。悪いのはこの男と女だ。

ただいまーーお父さんお母さん、いるーー？

ああ、姉さんか。あいつもだ、何を考えているか分からぬ。そして、いいことを思いついた。

サウスター「姉さんっ！…帰ったの！？今すぐ来て！父さんが、母さんが！…」

姉「何があつたの～？ キヤツ～！…」

姉は見てしまつた。両親の無惨な残骸を。

姉「嘘よ…・・誰が・・・もしかしてサウスター…・・あなたが・・・？」

サウスター「姉さんもそつやつて僕を疑うのか・・・」

姉「何言つて・・・うグー！」

姉の腹部には包丁が刺さつていた。そして、包丁が引き抜かれ血があふれ出す。

もはや、学校じりに世界に絶望していた。こんな世界じゃダメだ。僕の居場所は・・・

そんなことを考えて返り血を浴びて血だらけになつた服で近所の公園を歩く。街中の視線など気にならない。（この世界には警察と呼ばれるものではなく、その地域の民が経営する対犯罪組

織がある。）

そんなとき、僕はあの人に出会った。

アシュリーと名乗る女性は、ジニアットという不正ギルドのマスターだという。

「あなた、いい日してるわ。来るわよね。」

即答した。行くと。そここそが私の居場所だと感じたのだ。
勘は的中した。誰も信じあわない、弱いものは切り捨てられる、そ
んな理想の世界がそこにはあった。

そこで、私は科学者を務めた。私は自分でも分かる、天才だ。私に
できることはない。その気になれば、この城を飛ばすことだって
可能だ。

そして、私に課せられた課題。それは、神をも超越する力。当時の
私には何でもできると信じていた。

そして、私は研究を重ね、今の体を手に入れた。当然、神なんか超
えれるわけがない。

いつか、越えようと思つてたのに、超えてマスターに笑つて欲しか
つた。絶望の中で見つけた居場所だから。光だから。

目の前に蒼い剣が降つてくる。

マスター、あなたのお役に立てたでしょうか。

サウスター「マスター、私は・・・」

グシャ・・・ドパアアアアアン！

剣は床にめり込んでいる。剣が顔面を潰す。その瞬間、その剣から大津波が発生する。粘り気が強い水だ。その水に触れた蜘蛛は弾けとび、跡形もなく消えた。

ガイ「ハア・・・ハア・・・ユウト、終わったぞ！」

23話 メアリーの翻つぶし（1）

sideメアリー・マサヤ

ロイがここに強い魔力を感じるつづけで、ないわねえ。暇だわ～

皆今頃楽しくやつてゐんだらうな。

メアリーさん、まるでピクニックに来てるみたいだ。ここは戦場だよな？アレ？

メアリー「あれ？行き止まり？」

メアリーの前には壁がある。天井は高い、ここで終わってるはずないんだが。

真っ白な壁がメアリーたちに立ち入り禁止といつよつとそびえる。メアリーは邪魔なんだよ！と壁を殴つとした。しかし、白い壁に拳が当たることはなかつた。すり抜けたのだ。

メアリー「ホログラムか、脅かしやがつて。」

マサヤは完全に縮こまつてゐる。

？「え？誰か入ってきたーーああーービリビリショウ・・・」

メアリー「私はメアリー、この子はマサヤ。あなたは向ていつの？・・・」

か、可愛い！

名前教えちゃおうかな。

「ほ、僕の名前はボルジアント・フェアーレ。だ、第1部隊隊・・・長。隊長つていつも第1部隊は僕だけだけど。」

何、この子。ガリガリじゃない。ちゃんとご飯食べてるのかしら。こんなに色白で・・・。しかも第1部隊？てことはこの子が強い魔力の持ち主？でもそんな雰囲気は微塵も感じないわ。

メアリー「？なんで一人なの？」

「僕は、その・・・こんな性格だから・・・。」

メアリー「そうねえ、このギルドはいくつ部隊があるの？」

メアリーは胸を強調しながら言った。

「あつーあの・・・でも・・・・・・・・6つあります。」

メアリー「いい子ね。あと、キミは強いの？」

「え、えと・・・一応第1部隊隊長ですから・・・まあ。」

メアリー「ならいいわ、じゃあちょっと待つててね。」

メアリーは携帯電話を取り出し、マサヤを除く全員に部隊の数をメールで送信した。

「じゃあ、始めましょ」

メアリーは槍をボルジアントの頭に突き出す。

マサヤは外から見守っている。

メアリーはそのまま槍で頭を薙いだ。しかし、ボルジアントは後ろに飛びのいて距離をとる。全く構えず、寒そうにポケットに手を入れている。ちょっと待つてよ、まだ準備中だよ……という表情だった。

メアリーはお構いなしに突きを連続で繰り出す。高速で上下左右に変幻自在に槍を突き出しが、全部紙一重でかわされる。そして、最後に繰り出した切り上げは頬をかすめ、ボルジアントの頬に血が流れる。

ボルジアントの魔力が膨れ上がる。

メアリーはその上がりよう驚いた。1から100になるぐらいの飛躍的上昇だ。

「誰だあ？ブロンド、お前か？」

メアリー「ええ、そりや」

笑顔で答える。

「許さない・・・許さない・・・許さない・・・」

メアリー「かかってきなさいよ。」

この言葉にボルジアントが反応する。

「いいの? いくよ?」

だから早く来いっての、とメアリーは挑発する。

ボルジアントは、一瞬でメアリーの背後に移動した。そして、首に手刀を打とうとする。

メアリーは、ギリギリでしゃがんで避ける。集中してなかつたから全然わかんなかつたわ。危ない危ない。

そして今度は手刀をそのままたてに振り下ろし、脳天をかち割りつとする。

メアリーは槍を頭上に掲げ受け止める。ものすごい衝撃だ。当たつたらどうなることやら。

ボルジアントの手は瞬きを全くせず、常に見開いている。ハッキリといって怖い。

メアリーは起き上がり、槍でボルジアントを薙ぐ。ボルジアントはしゃがんで避け、アッパー・パンチを繰り出す。メアリーは体を反らして避け、つま先でボルジアントの顎を砕こうとする。ボルジアントは手刀ではじく。

メアリーは回し蹴りを繰り出す。ボルジアントの頭が一瞬メアリー

の股にいつた。それにより、ボルジアントは避けきれず、頭部に攻撃がヒットし、吹っ飛ぶ。

メアリー「全く、まだまだ子供ね」

ボルジアントは痛いけどそれ以上の収穫を手に入れたような顔をしていた。頭の中で映像を繰り返しているようだ。ためしに近くに落ちていた瓦礫を投げてみた。普通に当たった。しかも金的に。ボルジアントは痛そうにぴょんぴょんと跳ねる。

「アーニー、おまえの手帳の横に、アーニーの名前を記入しておいた。」

やつと起きた。

ホルシラントはこの世の織れりのよかな彦で、ハーハーと息を切らしている。

目は血走っています

ボルジアントは若干動きが鈍いが、動き出した。

走りながら飛び、膝をメアリーの顔面に叩きつけようとする。メアリーは足を掴み、回転しながら顔を地面に叩きつける。ゴスツ

マサヤは手で顔を隠している。

ボルジアントは鼻血を見てさらに発狂する。

さらに魔力が膨れ上がる。

24話 メアリーの蹴りぶし(2)

ボルジアントの魔力が膨れ上がる——

確かに、これは危険だ。

常人がボルジアントの近くにいるだけでビリビリになくなってしまう魔力なのだから。

ボルジアント「僕を怒らせたね……。せっかく優しく接し合おうと思ったのに、もうダメだあ！」

メアリー「へえ、楽しそうね。私はそっちの方が嬉しいわ。」

ボルジアントが動き出した。一瞬でメアリーの懷に潜り込み、メアリーの腹に手のひらを叩き込む。メアリーはその速さに動けず、もろに喰らってしまい、後方に吹っ飛んだ。

ボルジアントは止まることなく、追い討ちをかけよつとする。メアリーの顔面に膝蹴りを決めよつとする。

メアリー「うそつ、速つ……つづ！あつぶね！」

メアリーは咄嗟に起き上がり、槍で膝を受け止める。そして石突きで払いのける。

ボルジアントには全く構えていないが、隙という隙が見当たらない。

ボルジアントはメアリーに殴りかかる、メアリーも苦い顔をしながらも避け続ける。

時折揺れる胸をマサヤは見ようとする。やはりマサヤも健全なる男

子高校生だ、気になつて当然だろ。

マサヤ「動きづらやーだな・・・」

ボルジアント「えへ、お前可愛いから俺の玩具にする」

メアリー「えりこりー?」

ボルジアント「じつこりーと ハートポイズン!」

ボルジアントの皿の前に紫色のハートが現れた。ボルジアントが合図を出すと、それは高速でメアリーに飛んでいった。そして、命中するとそのままメアリーの中に沈んでいった。

メアリー「ちよー何コレー!」

特に変わった様子はなさうだ。

マサヤも一安心した。

ボルジアントは微かに笑みを浮かべた。

ボルジアント「これで俺の勝ちだね。メアリー」

メアリー「はあー? 気持ち悪い。気安く名前で呼ばないでくれる・

・ん?」

メアリーは違和感を感じながらもボルジアントに攻撃を繰り出そう

とする。

ボルジアントはノーガードである。

舐めやがって、とメアリーは渾身の突きをボルジアントの心臓めがけて突き出す。

なおもボルジアントはノーガードだ。

メアリー「はあ！！

え、何で？」

メアリーの攻撃はヒットしたはずだった。

しかし、槍の先がボルジアントの胸の寸前でピタリと止まっている。

メアリー「何！？ビリヤッて止めたの？？」

ボルジアント「いや？メアリーが勝手に止めただけだよ？」

メアリー「そんなはずは・・・クソ！何で出来ない！」

マサヤ「師匠・・・さつきのハートですよ！それになんか仕掛けがあるはずです！」

ボルジアント「い詫答へ。この人は僕のものだ。さつきのハートは、俺、いや僕が独自に生み出した魔術でああ。この術を喰らった人は、僕が倒れるまで僕のことを思い続けるのさ。無意識のうちにね。悪くないだろう？メアリー、思いの人に倒されるんだから。いや、このまま奴隸でもいいが。」

メアリー「気持ち悪いーーい・・・？」

ボルジアント「ほらほら、何か違和感感じてるでしょ？そのつひ僕のことしか考えられなくなるよ。」

25話 メアリーの脳つぶし？（3）

マサヤ（もしかして、これ、師匠じゃ勝てない？）

メアリー「アンタみたいな不細工、だれもときめかないわよ。」

ボルジアント「知つていろさ、だからこの魔術を作ったんだ。皆もメアリーみたいに僕を不細工と言つた。事実だけど許せなかつた。僕は外見で判断する人が大嫌いなんだ。この魔術を作つたときは興奮したよ。だつて、女が僕のことを見始めるようになつたんだもん。」

メアリー「なんともエロい魔術ね。」

マサヤ（俺にも教えてくれ！……）

ボルジアント「だけど、この魔術にかかつたものは途中で耐え切れなくなつて壊れてしまつた。体じやなく、心がね。」

メアリー「やつぱり嫌だつたのよ。そんなくだらない魔術作つて暇があるなら整形でもしたら？」

ボルジアント「そんなことを言つて、もう僕に對して違和感を感じているくせに。強がらなくたつていいんだよ、メアリー。ここまでも耐えたのはキミぐらいかな。」

ちなみに、マスターのアシュリーさんには全く効かなかつたよ。」

確かに、もう私の心は持たないかもしない。

脳の思考の40%はこのダメ男になつてしまつた。

ボルジアント「行くよ、メアリー。ほら！避けてみろ！」

ボルジアントの腹を狙つた右の蹴り。メアリーなら普通にバックステップで避けることができたはず・・・だが、メアリーはその攻撃を避けることなく、もろに喰らつた。

この感覚は、肋骨が2本ぐらい折つただろうか。でも不思議と嫌悪感を感じない。

ああ、術に落ちたのね・・・。

ボルジアントは更に骨ばつた拳で襲い掛かってくる。メアリーは自分の意思なのか避けずに受け続けている。

マサヤ「師匠！ダメです！避けて！！」

はっ！ そうだ、なにこんな攻撃受けているの？

メアリーはマサヤの掛け声によつて目を覚まし、距離をとる。すばらしく危ないかつ口の魔術だ。

これはもしかすると・・・

ボルジアント「そここの男、邪魔だね。僕とメアリーの二人の時間を・・・」

ボルジアントの目線がマサヤに向く。メアリーもその視線を目で追う。

ボルジアント「ふふつ、掛かつたね。メアリー、本当の狙いはメアリー、キミさ。ハートポイズン！」

ボルジアントの目の前にまたしても紫のハートが現れる。

本当に気持ち悪い。

ボルジアント「発射～」

メアリーは既に踏み込んでいて避けることができない。するりとメアリーの胸に溶け込んでいく。

メアリー「う・・・ああ・・・」

メアリーの頭の中にボルジアントの記憶が入り込む。

幼いころの記憶。

家族は父親との2人暮らし。

しかし父は居て居ないようなもの。

いつも女を作つては夜に遊びにいく。まだ幼かつたころのボルジアントはこのことを父はお仕事が忙しいんだ。と思っていた。ボルジアントはある日、父の預金通帳を見てしまった。

45000

さすがのボルジアントも驚いた。
この預金額の低さに。

そして、ボルジアントは尾行を試みた。

そして見たのは父一人と女三人が一緒に歩いている。

父は女たちと宝石店に入る。

どれもこれも高そうだ。しかしボルジアントは宝石などには興味はない。純粹に父親が何をしているかだ。

父は、店員を呼び出し、ショーケースを指差す。1つではない、4つはある。

女たちは跳ねて喜んでいる。

ボルジアント「お父さんは…やめてよー。」

あると父が寄つて来て小声で、

父「げ、ボルジアント…お前向で」に腰るんだー。」

と言つた。

ボルジアント「こんな高そうなもの…僕はお父さんは仕事して
るのかと…」の嘘つきー。」

女1「なに〜」のナ

女2「もしかして息子?。」

女3「ぶつせ〜〜」

父「違うー。んな子俺は知らんー。」

ボルジアントは確かに聞こえた。心がガシャンと割れる音が。
呆然としていたボルジアントに父がのしかつてきた。

ボルジアント「え? わよ、お父さん重いよー。あれ? お父さん?」

死んだ。父は死んだ。だがどうでもよかつた。誰だ?

アシュリー「酷いわね〜、息子に誰だなんていう男は、生きている

価値がないわ。そこの女たちも、女と呼べるにはほど遠い種族ね。
死になさい。」

女たちはバタバタと倒れ伏した。
ボルジアントにとつては強すぎるくらいの刺激は、逆にボルジアン
トを覚醒させてしまった。

アシュリー「来なさい？貴方の好きなようにさせてあげるわ。」

そこからは、覚えていない。

だが、魔術を作つたときは覚えている。
無我夢中で、完成したときは嬉しくて死にそつだつた。
早速、女兵士に試した。
見事、女を人形にすることができた。
男にも試したが、全く変化がなかつた。
まあ、あつたら嫌だが。

そして、もしやと思い、アシュリーの元へ向かつ。
そして、試す。

右手ではじかれた。

正直落胆した。せつかくマスターを口の人形にすることはできたか
もしれないのに。

マサヤ「師匠！師匠！…」

マリー「…」

マリー
・・・・・・・・・・・・・・

誰だよじや ますんな

マリー「…」

私は何を！

さつさと蹴りをつけて・・・つてアレ？動けない！？

何コレ・・・鎖？

くつや、ピンピンに張つてやがる。

マリーの四肢には赤色の鎖がつながっている。
壁から伸びている鎖はマリーを離さない。

ボルジアント「えへへ、マリーの思いを確かめるためにこの魔術
を使ってみたんだ。自我を失っていたマリーは簡単に掛かってく
れたよ。まあ、2発喰らって、今正氣でいることはミラクルってや
つ？ちなみに、その鎖は僕のことを思つほど強く縛るんだよ。その
うち、上半身と下半身が千切れるかもね。」

メアリー・マサヤ「……」

この間にも鎖はどんどん張つていく。

ボルジアント「あつはつはーこれからどうやって遊ばつかなー、ねえメアリー」

メアリーは力なく頷いた。

マサヤの周りに、ドツと重い魔力が吹き荒れる。マサヤの腕、脚は光り輝き、いくつもの魔法陣が現れている。マサヤはこんなの初体験だが、使い方は分かる。

この10個の魔方陣は、俺のためにある。腕に3つずつ、脚に2つずつ。

魔力に底を感じない。火事場つてやつか。

これは、

祖なる魔術

”ギギニング・テン・スペルズ”

ボルジアントも目を見開いて驚いている。メアリーは俯いたまま、時折呻き声をもらす。

マサヤ「待つててください師匠ー今助けますー」

メアリーの返事はない

26話 マナヤ覺醒（前書き）

今回、次回は属性「じぶんや」「じぶんや」です

ビギニング・テン・スペルズ

魔術、それは古代25人の手によつて創造された。魔方陣に魔力を流し込むという単純な発動方法だつたが、当時の人間たちは魔方陣から作成しなければならない。そして、その25人は、何代もの時間をかけて、祖なる魔術、ビギニングを創造した。

威力は強力すぎた。副作用もハンパではない。そして、1人の男はあまりの強力さに耐えられず、自我を失つてしまい。多くの人間を殺した。

その中には、ビギニング作成者も居る。

故に、この魔術は禁術とされ、封印されてきた。

だが、自らその魔術を呼び起こした者は2人居る。

それは、現在覚醒したイワモト・マサヤ

そして・・・もう一人

ロイ・ベルデム

この男は、呼び起こすとともに、改良を重ねた。改良も決して簡単ではなかつたことを理解していただこう。改良の結果、得たもの、それは

副作用の軽減

威力の向上（小）

詳細は後ほど

sideマサヤ

力が体中にみなぎる・・・

これなら、あの男だつて。

マサヤ「右足に宿りしは、重力をも超越する風！エンシェント・ソニック！」

ボルジアント「か、風だとおー！」

マサヤが一瞬にして消え、ボルジアントの背後へ。そして、右足で頭を蹴る。ボルジアントはきりり反応し、腰を低くしかわす。そして、ボルジアントは腹に蹴りをお見舞いする。マサヤは避けられず。当たつてしまふ。腹の部分は金属化していない、いや、できない。彼は今、腕と脚に金属化を集中しているため、腹にまで延ばしたと

する。すると、この魔術は一瞬で消えるだろう。

マサヤは空中で受身を取る。そのまま空を蹴り、ボルジアントの顔面を殴る。ボルジアントはまたもギリギリで避け、カウンターを決める。

ボルジアント「は、ははー見かけだけか！舐めないで欲しい、僕、いや俺だつて第1部隊隊長だ！お前なんかに負けてたまるか！なあメアリー！」

メアリーの様子がおかしい。

一刻も早く倒さねば。

マサヤ「左腕に宿りしは、地球をも操る力！ガイア・フォース！」

マサヤの左腕に土属性が纏わりつく。

ボルジアントに向けて再び走り出す。ボルジアントの正拳にあわせて、左手を振り上げる。すると、床が盛り上がり、正拳を受け止める。

そして、床の壁が崩れた先には・・・誰も居ない。

背後か！

遅かった。ボルジアントは右の蹴りをくらい、背中を突き出した恰好で吹っ飛んだ。壁に激突し、パアアアアンと壁が少し壊れる。

ボルジアントは痛てて・・・と起き上がる。

ボルジアントは血を吐いている。

ボルジアント「クソクソ！もう許さんー火と水、今ここに交わり、消えることなく永久に燃え続ける炎となれ！蒼炎龍！」

ボルジアントは背後に巨大な蒼い炎の龍を召喚した。目だけは紅い。

メアリー「召喚・・・」の地に降臨し、邪念の血を啜り渴べせ！あとは任せたわ、ルージュ！」

ボルジアント・マサヤ「へ？」

メアリーの目の前に細身で170cmくらいの魔女が現れた。爪は長く、全身黒い化粧ばかりだ。

ルージュ「メアリー？何よその無様な格好。」

メアリー「なんのなんの、演技よ。演技。」

メアリーの鎖が緩々になっていく。そして、メアリーの脚が地に着く。

メアリー「でも動けないから、せめてそここの炎の龍を潰して あはは」

ルージュ「そんだけ？手こなさそつな相手ねえ。だったらそこのピカピカの少年のほうがいいわよ。おにしあうだもの。」

マサヤ「メアリーさん、最初からお願ひしますよ～」

メアリー「いやいや、最初から私はあなたの覚醒を狙つてたのよ。ビギニングが使えるのこれでマサヤとロイよ。しかも風だなんて、古の属性じゃない。つかルージュ！動け早くな！」

ルージュは3倍はあるだろう大きさの龍の頭に向かつて跳躍する。龍が炎の弾を発射する。ルージュは受け止め、跳ね返す。しかし、やはり炎、吸収してしまつ。

ルージュ「なんだ、やっぱり自分の炎じゃ巨大化しないか……」

ルージュはつまらなそうに右手を前に出し、手を広げる。

ブラッド・イクスピロージョン

ルージュがそう呟くと、手から極太の紅いレーザーが現れ、蒼炎龍を貫く。

胴体にでつかい穴を開けられた龍は倒れ、周りの炎はだんだん消えていった。

ボルジアント「そんな……僕の守護神が……僕だけの……」

ルージュ「あ、貴方が作ったの？道理で弱いわけだ。いい？私たちは年齢で強さがほとんど決まるのよ。もちろん例外もあるわ。ちなみに私は734歳。でも300歳で私より強いのも1人だけ居るけどね。」

メアリー「手綱づけるの大変だったんだから。もう

ルージュ「あなたの熱意に負けたのよ。でも、デートと被つている日は来ないからヨロシク。じゃあね～」

ルージュは消えていった。

メアリーは手を振っている。

ボルジアント「どうこうことだ……メアリー、キミは……」

メアリー「効くかあんなシヨボイ術。マサヤが楽しみで掛かつた振りしてたの。記憶流れ込んできただけどね。同情するわ。それ・だ・け」

「マサヤ、こりませんよ。こうのへやの痛かったんですよ？」

メアリー「私のほうが痛いわ！何発喰らつたと思つて・・・」

ボルジアント「五月蠅い！――！」

メアリー「マサヤ、今の貴方なら勝てるわ。」

マサヤ「はあ、何か適當ですね・・・」

マサヤ「グラビティ・ゼロ」

再び風属性の魔法を発動し、神速でボルジアントに襲い掛かる。

左手を振り上げ、床を操作し、ボルジアントの動きを封じる。
そして金属化している右腕で、思い切り顔を殴り飛ばそうとする。

マサヤ「右手に宿りしは、地獄より現世に迷い込んだ業火！ヘル・
ブレイズ！」

右手に黒色の炎を纏つた右手はボルジアントの頬をとらえ、抉り取つた。

その顔は見るも無惨になり、顔の三分の二を失つている。

マサヤ「ヘル・ブレイズ」

ボルジアントの周りに黒炎が回り込み、一気に飛び込む。一瞬にして灰になつた。

簡易火葬だ。

これでボルジアントは成仏できる・・・・んじゃない？。

メアリー「ふんっ！」

メアリーが鎖を引きちぎる。マサヤは呆然としていた。
おいおい、体見せてみろや。筋肉だらけだろ。

メアリーは携帯を取り出す。

メアリー「ロイ？ 終わったわ。 で、分かつたことなんだけど、マスターの名はアシュリー、女性。相当強いわ。」

ロイ「大丈夫だ、俺を誰だと思っている。」

メアリー「そうね。あと、マサヤがビギニングに覚醒したわ。」

ロイ「ほつほお、早いな。使えていたか？」

メアリー「ええ、もうじき倒れるはずよ。」

ロイ「まあ最初はそうだな。分かった、じゃあ先に入り口に戻つておけ。ガイとコウトが居るはずだ。」

メアリー「了解、気をつけてね。」

27話 お嬢様による一方的な攻撃つてどーよ（1）

間が空いたため、一応キャラを確認

ライラ・パルキオプス
(フィアラル)

リップ、シュバリエ
(ハーピィ)

の3名で行動している。

ライラ「なかなか敵が現れませんね・・・」

リップ「班の数は確かに6つですよね。そのうち、メアリーさんが連絡してきたってことは、5つのうちどれかですね。或いは1班以上。

「

ライラ「早く来ませんかねえ」

シユバリエ「・・・プロッサム様と似て貴方もなかなかの戦闘狂ですね。」

ライラ「ええ、私がだから。」

そんなことを話していると、シユバリエがいきなり背筋を伸ばし、周囲を警戒した。

ビリヤークシユバリエは周囲の気配を把握できるようだ。正確に。

シユバリエ「いますね・・・A級が2人・・・まだ気づかれてません。」

ライラ「Aって強いの?」

シユバリエ「プロッサム様はうです。でも私たちじゃ勝てっこないです。」

ライラ「だから私が居ますよ。あなたたちは指一本触らせませんで安心してくださいね。」

シユバリエ「あの角を右に曲がって、左に曲がつたところのドアの奥です。かなり広いですね。」

ライラ「ええ、覚きましょ。」

最初のうち半白で統一されていた壁の色も、角を曲がつた瞬間、黒

も田立つよつになつた。紫も混じり、不思議な雰囲気を醸し出している。

ライラはドアを慎重に開ける。

？「え？ 来たつて？」

？「ほら、あそこー！」

？「ほんとだ！ しかも全員女・・・」

二人の醜く太つた男が2人。奥のショーケースにはお菓子がたくさん飾つてある。

探せばなんでもありそうだ。

「つと、自己紹介からネ。オデの名前はミルケリーム」

「オイラはシユルクレイム。よろしくだヨ」

ライラ

「地より出でよ。翼を失い、正義に見放された墮天使。憎しみと憎悪の矢を放て！ケルビム！」

狡猾すぎる故、精靈界から追放されし魔術師。黒きナミダを力に換え、真の主の武器となれ！ハウリロプラス！

悪を碎き、善を全てとする光の精靈。悪しき者に慈悲なき制裁の光を！ヴィーナス！

主を守護するためだけに産まれた、悲しき黄金の盾。今こそ、産まれた意味を覆し黄金の矛となれ！パー・フェクト・ガーディアン！！

2人の話を完全に無視したライラ。
そして、4体の精霊を召喚する。

ケルビムと呼ばれた精霊は天使だが、全身が黒く、翼が赤い鎖で縛られている。手には黒く輝く弓。矢にはとてつもない魔力が込められている。目は怒りに満ちあふれ、主といえど選択を間違えれば反逆もありえるだろう。

ハウリロプスと呼ばれた精霊は魔術師のような形状をしており。シリクハットを目深に被っている。手には真っ白の手袋。まるで手品師のような格好だ。口元はわずかに釣り上がりついてとても不思議だ。もしかしたら1番危険かもしない。

ヴィーナスと呼ばれた精霊は、超いい人そうな女の天使だ。頭上には天使の輪。時折翼を動かしている。目は閉じていて、口元は優しい笑みを浮かべている。

パーフェクト・ガーディアン。恐らく最強だろう。金色のブロックを積んだようなその巨体に、同じくらいの高さの盾。大砲やガトリングが搭載されていて、もはや城だ。この精霊は15メートルくらいだが、他は3~5メートルだ。この黄金のボディには傷ひとつかなそうだが、あまりに大きいので下を潜れたりしないだろうか。

リップとショバリエは口をパクパクさせている。

ライラ「魔力供給お願いしますね。まだ余裕ですけど。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0087z/>

金剛の武人

2011年12月25日18時45分発行